

WEB公開版

掲載許諾の関係で一部資料をグレー表示としてあります

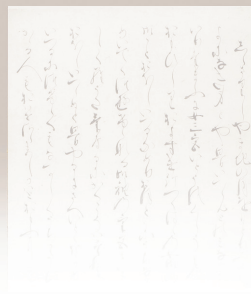
寢覚める古筆切

大槻福子
久保木秀夫
中川照将
仁平道明
横井 孝
(五十音順)

司会 横溝 博

特集座談会

夜の寢覚



武蔵野書院の新刊ご案内

無料配布

MUSASHINOBUNGAKU

武蔵野文学

2014
増刊

春号

武蔵野文学 2014 増刊春号

MUSASHINOBUNGAU 2014 spring round-table talk

編集：武蔵野書院編集部
座談会企画：王朝物語研究会
座談会編集：横溝 博
発行所：武蔵野書院
印刷製本：互恵印刷
発行日：2014年5月25日

1

◎特集 座談会

夜の寝覚

大槻 福子
久保木 秀夫
中川 照将
仁平 道明
横井 孝
横溝 博（司会）
—五十音順—

ご愛読者の皆様へ

*本誌広告に掲載されている出版物は、全国の書店でお取り寄せができますので、できるだけ書店をご利用下さい。

*お近くに書店が無い場合や、特にお急ぎの場合は、電話・FAX・はがき・e-mail等で直接小社宛ご注文下さい。また、小社ウェブサイトでもご注文いただけます。

<http://www.musashinosho.co.jp>

*弊社より直送する場合は、お買い上げ金額合計が2000円以下の場合、送料200円がかかります。また、お買い上げ金額合計が1000円以下の場合は、併せて実費の送金手数料をご負担いただきます。

38

◎新刊のご案内

2014年4月6日 於：學士会館 305号室にて収録



既刊分

詳細は小社WEB
サイトでご覧ください！
<http://www.musashinosho.co.jp/>
考えるシリーズ 好評発売中！

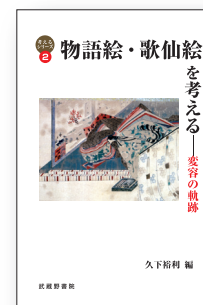
福家俊幸 編
久下裕利 編
1 王朝女流日記を考える
追憶の風景
ISBN 978-4-8386-0432-1
定価 3,000円+税



秋澤 互 編
袴田光康 編
3 源氏物語を考える
越境の時空
ISBN 978-4-8386-0433-9
定価 3,000円+税



久下裕利 編
2 物語絵・歌仙絵を考える
変容の軌跡
ISBN 978-4-8386-0434-6
定価 3,000円+税



久下裕利 編
4 源氏以後の物語を考える
継承の構図
ISBN 978-4-8386-0435-3
定価 3,000円+税



久下裕利 編

考えるシリーズ
5

王朝の歌人たちを考える—交遊の空間

ISBN 978-4-8386-0437-1
定価 3,000円+税

考えるシリーズ
最新刊
絶賛発売中！

最新刊 2013年5月刊行！



伊勢・中務の交遊と文芸活動……………尾高直子
雅子内親王と敦忠、師輔の恋……………松本真奈美
高光とその周辺
——師氏女・愛宮・師氏からの発信……………笹川博司
公任と具平親王家に集う歌人たち……………福家俊幸
家集に見る和泉式部・小式部内侍の恋
——「かたらふ人おほかりなどいはれける女」とは誰か……………武田早苗
紫式部とその周辺
——『紫式部日記』『紫式部集』の女房たち……………廣田 収
赤染衛門の人脈——赤染母娘を中心として……………田中恭子
川を渡る四条宮下野——宇治殿に集う女房たち……………和田律子
後宮の文化圏と出羽弁……………高橋由記
定頼交遊録——和歌六人党を中心として……………久下裕利
あとがき——歌仙絵〈紀貫之〉像の変容……………久下裕利

今、一番ホットな話題である「『夜の寝覚』末尾欠巻部断簡の出現」をはじめ、秀逸な論文を収録！ 必読です。
口絵には新出伝後光厳院筆『夜の寝覚』断簡（実践女子大学蔵）をカラーで掲載！

考えるシリーズⅡ

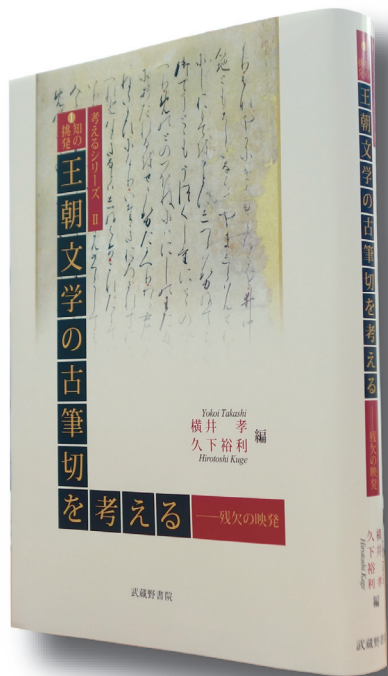
王朝文学の

古筆切を考える

―残欠の映発―

横井 孝
編
久下裕利

定価：本体
10,000円＋税
A5判上製カバー装
328頁
ISBN
978-4-8386
-0271-1



I 特集 『寝覚』『巢守』の古筆切

『夜の寝覚』末尾欠巻部断簡の出現
―伝後光厳院筆物語切の正体―
挑発する『寝覚』『巢守』の古筆資料―絡み合う物語―

横井 孝
久下 裕利
大槻 福子
栗山 元子

『夜の寝覚』末尾欠巻部分と伝後光厳院筆切
『夜の寝覚』『巢守』の古筆切をめぐる研究史
座談会 王朝物語の古筆切

池田和臣・加藤昌嘉・久下裕利・久保木秀夫・小島孝之・横井 孝(司会)

II 物語の古筆切

定家本源氏物語本文研究のために―四半本古筆切の検討―
伝聖護院道増筆断簡考
―新出賢木巻断簡の紹介から、道増の用字法に及ぶ―

佐々木孝浩

伝西行筆源氏集切の意義

―鎌倉時代における『源氏物語』享受の一端として―

田坂 憲二

『源氏人々の心くらべ』『源氏物あらそひ』の祖型の断簡

―『源氏物語』評論の初期資料発掘―

狭衣物語のからみあう異文―古筆切を横断する―

池田 和臣
須藤 圭

III 和歌の古筆切

冷泉家本と古筆切

田中 登

『古今集』高野切の伝来と由来

久保木秀夫

藤原通俊の続新撰について

―伝足利義尚筆後拾遺集断簡の紹介―

古筆切と機縁と―あとがきにかえて

執筆者紹介

浅田 徹
横井 孝

▼横溝司会…本日は新年度のお忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。いましました。まず最初に司会の私からこの座談会の趣旨を説明させていただきたいと思っています。

今回の座談会は、近々刊行される久下裕利先生・横井孝先生編『考えるシリーズⅡ①挑発 王朝文学の古筆切を考える―残欠の映発―』(本書)の刊行によせて、古筆切を集めたいと企画したところからスタートしました。久下裕利先生から企画・立案を託されたのですが、その当初の計画としましては、古筆切の中でも特に物語の古筆切を中心に扱って、さまざまな角度から古筆切研究の可能性というのを見いだしていこうと予定していました。ところが本書の中で、これは研究史上、まことに重大な論考が発表されることを知り、急遽企画を変更したわけです。それと申しますのは、横井先生ご紹介くだ

さっている『夜の寝覚』の末尾欠巻部の古筆切ということになるわけですが、この論考を拝読して、もうこの際『夜の寝覚』に特化してしまっ、しかもこれまでいろいろ議論がされていた伝後光厳院筆の切について、ここで一度全て見直して考えてみようではないかとなったわけだ。

それだけの価値のある発見がこの本の中で提示されたということ、ここは一気にかじを切りまして『寝覚』特集ということで企画を起し直した次第です。

『寝覚』の古筆切についてはこれまでいろいろ議論されてきているわけですが、考えてみれば『夜の寝覚』というのは平安後期物語として、つとに知られている作品でありながら、ただ非常に大きな欠巻部を真ん中と終わりに抱えている。そして、一つの物語として完全形で読むということができない作品として一般に読まれてきているという、非常に稀有な王朝物語であるというこ

とができるかと思えます。そうした中で欠けている部分をうかがう、さまざまな資料というものが周辺に存在しているということでも、『寝覚』

は非常に特徴のある作品であり、またその研究であるわけだとして、このたびの発見、それから、これからまた報告が続くと思われる古筆切などが、不断に『寝覚』研究というものを挑発し続けるということになるのかと思われま。そういう意味では『夜の寝覚』というのは、ほかの物語とはまたひと味もふた味も違って、まさに物語としてどう読むか、解釈するかということも含めて現在進行形というような状況であって、文学作品としての評価もいまだに揺れている、そうした物語ではないかと思うわけです。

いずれにしても新しい資料の発見というものがこの『夜の寝覚』の研究を後押しして、また進めていくということは確実だと思われま。そうした古筆切研究によって『寝覚』の研究というものがあるのか、今回は『寝覚』研究をリードし引張ってこられている皆さまにお集まりいただいて古筆切を用いた『寝覚』研究の可能性と展望についてホットな議論をここで展開してまいりたい、というのが大きな狙いであるわけです。

ちよつと長くなりましたが、趣旨としては以上のようなところで、一番最初に申しましたように『寝覚』研究史上、画期的な発見がありましたので、まずはそのこ



横溝 博 ―Yokomizo Hiroshi

1971年8月東京都生。早稲田大学大学院博士後期課程。博士(文学)。東北大学文学研究科准教授。論文に「按察家の人々」(「源氏以後の物語を考える」)、著書に「平安文学の古注釈と受容」(共編)など。

とから話を始めてまいりたいと思います。
それでは、まず横井先生に今回発表された新出の後光厳院の切について、改めてご紹介いただければと思うのですが、いかがでしょうか。

伝後光厳院筆 『寢覚』切出現の衝撃――

▼横井…今回の話の発端は仁平先生にあるわけですが、仁平先生には静岡大学と一緒に同僚として勤めていたという縁がございまして、それ以来ずっと公私にわたっているいろいろとお教えいただいております。今回話題になる伝後光厳院の物語切というのを見せていただいたのもその一環でして、もう十何年前でしようか。ご架蔵の断簡の写真を見せていただいている

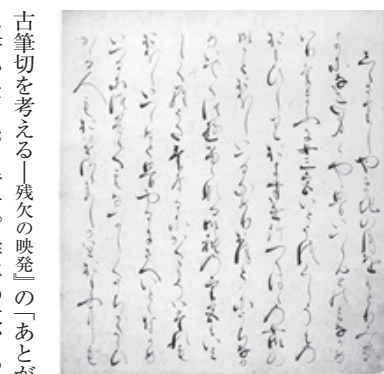


横井 孝——Yokoi Takashi
1949年6月東京生。駒澤大学大学院博士課程。実践女子大学教授。著書に『平安後期物語の新研究 寢覚と浜松を考える』、『源氏物語の風景』など。

「先見の明のある方は違うということでしょう」永井和子先生がそれに鋭く反応された。非常に好意的に紹介されたんですね。それ以降、今日も紹介されるように、仁平先生が本格的な論考を出しになりました。それ以降の顛末については皆様方ご存じのとおりです。

私の個人的な事情は今回の武蔵野書院で刊行してくださる『王朝文学の

いろ、縷々ご説明いただきました。そのときに恐らく論文におまとめになった概略をお聞きしていたのではないかと思います。仁平先生のおっしゃることに納得はしたのですが、後に議論になるように、決め手、確証となることが実は残念ながら、なかった。その部分が非常に物足りないというか、残念な気がしたものですから、恐らく曖昧な返事をして仁平先生に「こいつは駄目だ」とあきられてしまったのではありませんか、と今になって思いますが、仁平先生が『解釈』という雑誌にたった一ページのご論考、ご意見の要旨となるようなものを発表され、たったそれだけが表に出ただけだったのですが、



新出 伝後光厳院筆『夜の寢覚』断簡
(実践女子大学蔵)。編集部注——本誌表紙には美麗な軸装を掲載しています。

古筆切を考える——残念の映発の「あとがき」に書いたとおりです。昨年の末、ある古書店の方から画像付きのメールを頂いて、それが何とあの伝後光厳院筆の未詳物語とされていた断簡だったのです。しかも歌があつて、『拾遺百番歌合』『風葉集』、それから大阪青山の『夜寢覚拔書』のあれと重なりました。すぐさま購入を決めたわけですが、ちょうどその折も折、勤務先の学部が渋谷に移転することになっておりまして、事業の一環として記念行事をするのに併せて、展覧会・講演会などのイベントを考えておりました。しかも私がその会の企画担当でしたので、とうぜん目玉が欲しい。そういう時期でもあつたので、これは大学に収めるべきだろうと考えて、大学で購入することが決まったという次第でございます。その展覧会



仁平 道明——Nihei Michiaki
1946年12月栃木県生。東北大学大学院修士課程修了。和洋女子大学人文社会科学系教授。著書に『和漢比較文学論考』『物語論考』など。

——この断簡によって、これまで宙づり状態だった一連の断簡が『夜の寢覚』の末尾欠巻部のそれとして位置づけることができるということ。少なくともその判断の鍵を握る断簡になった、そういうことが分かった次第です。

細かいことを申しますと、『拾遺百番歌合』『風葉集』の場合、二句目が「やまべ」となっておりますが、伝称筆者を一にする『夜寢覚拔書』では「やま」

を開くに当たって願ってもない目玉商品、目玉の資料が出現したということになったわけですね。

その内容については皆様方のお手元にある私の原稿のとおりです。勉強不足なものですから資料紹介程度ですが、申し上げたいのは三点だけ。まず第一点として新出断簡の冒頭の「しらざりしやまぢの月をひとりみて／よになき身と思ひいづらん」これは散逸資料の和歌と合致するという点。それから二点目に、伝称筆者を後光厳院とする断簡と一連のものと見なして差し支えないだろうと判断されること。それから三点目として、――循環論法になつてしまいそうなんです

筆者を「一にする『夜寢覚拔書』では「やま」」となつていて、この断簡と一致するということ。こういうようなことが指摘できるのではなからうかと思つた次第です。そのことを今回の紹介論文に書かせていただきました。私どもの役割というのはここまでで、幸いなことに最初に触れることができた研究者として、最低限の責任を果たしたということになるんじゃないかと。あとはこれを組上に載せて、皆さん方の自由なご研究に任せたい。無責任なようですが、現在はそう考えております。以上です。

▼横溝司会…どうもありがとうございます。本当に大変な世紀の発見と申し上げてよいかと思いますが、王朝物語でこう



伝後光厳院筆・物語切(仁平道明蔵)

した不明だった部分を補うような古筆資料が発見されるということは冷泉家の『いはでしのぶ』^{*2}のほかは近年なかったことだと思ひますので、しかもそれが『寢覚』の末尾の断簡の、まさしくそこに明らかに相当する本文であるということが、ほかの資料によつても裏付けられたということで、横井先生がお探しになった古筆切に関しては確実に『寢覚』の一部であるということが、これで言えてくるかと思ひます。これは本当に物語の末尾部分の復元ということだけではなくて、物語そのものの伝来とか伝流という大きな問題にも関わってきますし、非常に大きな広がりを持つてくる、意味のある資料ではないかなと思ひます。

これまでの『寢覚』研究では古筆切

*2 横溝博「冷泉家時雨亭文庫蔵『いはでしのぶ』について——主として断簡五紙の整理に関する考察——」(『中古文学』第62号、1998年11月)など参照

*1 仁平道明「伝後光厳院筆物語切は寢覚末尾欠巻部か」(『解釈』48巻、2002年12月)

を、一連の伝後光厳院筆切を末尾の復元に用いるか、用いないかということで、非常に積極的にそれに応用していくという研究方法と、割合自制的な立場で、それが実証的に確認されるまでは、明らかなものだけを欠巻部を推定する資料として使用していくというような二つの方法があったかと思うんですが、まさに発見が待ち焦がれていた、両者の研究方法を切り結ぶような資料として、今回の発見は注目されますね。

この資料の出現について、まず率直なところの感想をお伺いしたいと思います。まずこれまで後光厳院切を用いた研究を積極的に論じて、推し進めてきていらつしやる仁平先生にご感想といいますか、この発見についてどういう感想をお持ちかということをお聞きしたいと思いますが、いかがでしょうか。

▼仁平…今回の座談会の資料をお送りいただき、横井先生の論文を拝見して、「やはり」という思いでした。少し長くなりますが、私が伝後光厳院筆の断簡を『寢覚』の末尾欠巻部の山場の断簡だと主張するに至った経緯を話させていただきます。私は『寢覚』については研究らしいことはしてなかったんですが、実は関心だけは、大学に入学して国文学研究室に入ったところから持っておりまして。日本芸研究会と

いう学会の学生会部会で平安文芸小研究会というのがありまして、そこに国文学専攻に進学して入会いたしました。そこで、後に岡山大学教授になられた工藤進思郎さん、それから板垣昭子さん、この方は卒論・修論で『夜の寢覚』を扱われた優秀な方だったんですが、そのお二人に教えていただいた『夜の寢覚』を読みました。テキストはこの岩波の『古典大系』でした。当時の鉛筆の汚い書き入れがあったりして、ちょっとお見せするのは恥ずかしいんですが、これで読みました。

そのとき、この阪倉義さん校注のテキストの解説のところにこんなふうにあつたのがちょっと気になったんですね。末尾欠巻部についてなんですが、「窮地に追い詰められた寢覚上は何者かの力によって急死し、また蘇生する、いわゆる擬死という極めて非現実的な秘法によって白河院より脱出することができた」という、解説のこの推定を読んだときにちよつと違和感を覚えたんですね。『寢覚』は最初のところでは「天人が下つてきて」という設定がありますが、これはあくまでも夢の中での設定でして、全部が全部現実的だとは申しませんが、かろうじて現実世界に踏みとどまっているんです。その後の展開を見てみますと『狭衣』のような荒唐無稽な設定というのはありませんで、



いろんな展開も、男女関係のかなりリアルな表現なんかもありまして、そういう『夜の寢覚』の世界の表現と阪倉さんの推定がどうも違い過ぎるんじゃないかと思つたんですね。非現実的な、それこそ秘法を用いて、死んで、生き返つてというような、これはその後、随分いろんなものにも共通して見られる推定なんですが、一年かけて『寢覚』を読みまして、これはおかしいと思つたんです。

そのときは、おかしいと思うだけで、末尾欠巻部でその部分は存在しませんから、それ以上のことはわからず、違和感だけが残っていたわけです。気になりながらそのままになっていました。その後、静岡大学に勤めるようになりました。当時、東北大学の助手をしていた阿部武彦さんと一緒に東北大学の狩野文庫の『寢覚』の写本を全部翻刻しようという話をいたしました。全部複写したんです。翻刻を始めたんですが、昭和六十一年に高村元継さんの『校本夜の寢覚』*3が出まして、これはもう全文翻刻しても仕方がないということで、実は途中で翻刻しながら中止してそのままになっているんです。そんなふうに関心だけは持ち続けていたんです。またその後古筆切にもだんだん関心を持つようになりまして、静岡大学にいたところから少しずつ集めてはいたんですが、東北大学に移ってから熱心に古筆切、特に物語切を集めたり、調べたりするようになりました。附属図書館の地下に潜つて『古筆学大成』だとか『手鑑』の複製を、座り込んで眺めたりということをしていました。一枚手に入れると、そういうものを眺めるといふことを繰り返して、手鑑の複製の写真をあらかた眺めたんですが、そんなことをしていたところ、平成十三年に京都の潮音堂から『潮音堂書籍典籍目

録』の第二号が送られてきました。その目録に、きょう持つてきました私が『寢覚』の末尾欠巻部の山場の場面だと言っている、その場面の断簡が載っていたんですね。ただ、これを入力するときに多少紆余曲折がありまして、最初は、目録でこれを見なかったんです。目録の最初のほうに出てくる別の古筆切に夢中になりまして、すぐ「何とかこれを譲つてくれ」と言つて交渉していたんですが、後になって、後ろのほうを見ましたら、愕然としました。これは、前から気になっていた、あるいは『寢覚』の末尾欠巻部の断簡ではないかと思つていた、『古筆学大成』に収められている断簡のツレだと。しかも、これは例の『寢覚上が白河院にいて』という山場ではないかと。目録が届いて十日ぐらいたつていたんですが、なんでこれを早く見なかったんだらうと思つて、本当に泣きたくなりました。潮音堂に電話をしたんですが、いくら何でも売れているだろうと思つていました。そうしたら、なんと、残っているという返事だったんです。



大槻 福子 — Otsuki Fukuko
1960年10月生。甲南女子大学大学院博士後期課程単位取得退学。國學院大学・博士(文学)。武庫川女子大学非常勤講師。著書に『中世王朝物語の表現』『夜の寢覚の構造と方法』『平安後期から中世への展開』など。

それを入手しまして、いろいろ検討を加えていつて、論文といえるようなものではないんですが、雑文も含めてこれまで四本書いてまいりました。ただ、この私の四本の雑文・論文での主張に対しては否定的な見方をされる方も当然おいでして、慎重にそれについての判断を留保したいという方とか、言うとおり『寢覚』ではないかと賛成してくださる方など、いろいろ意見の方がおいでだったんですが、今回の横井先生の発見で、たぶん私の言ったことに賛成してくださる人が増えるのではないかと思つております。ということで、今回の横井先生の発見、そのご報告というのは、私にとって、非常に嬉しいことです。

▼横溝(司会)…ありがとうございます。つづいて大槻先生、いかがでしょうか。

▼大槻…横井先生のこの度のご発見とい

* 3 高村元継編『校本夜の寢覚』(1986年、明治書院)

うのは本当に、これはもう間違いなく『寢覚』の切です。で、拝見できますのも大変光栄ですし、また、このことで『寢覚』の末尾欠巻部分の研究がより進むということも間違いありませんので、本当に素晴らしいご発見だと思います。お教えいただいて大変ありがたいことだと存じております。

ただ、今回の『寢覚』の切が間違いないとしましても、そのツレとされている伝後光厳院筆の一連の切が全部『寢覚』のものであるかということになりますと、私の今回の論文にもちよつと書かせていただいたんですが、いろいろ問題があると思うんですね。一つには、内容的な問題がありますのと、それから形式の上でも、同じ伝後光厳院筆で字の大きさであるとか、サイズや行間とか、そういうものが一致した場合であっても、違う物語の切だということは、あり得るんじゃないかと思うんですね。

そう考える理由としましては、後光厳院とされる、この筆者の書いた物語の種類と量が実は非常に多いのではないかということです。今回の『寢覚』だけでなく『源氏物語』についても一葉あります。平成二十三年十一月に行われた「古典籍展観大入礼会」の目録に載っていたもので、その写真を一連の切と同じサイズに

引き伸ばしたものを持ってきたんですが、これは一連の切と比べると、字数はほぼ同じですが、行間が少しずれているんですね。ですが、字体から見たら、これは同じ筆であろうと私は考えるんです。比較の為にいくつかの字を並べて貼ってみただけですけど、コピーを取って「人」とか、「き」「め」「な」とか、それから「景色」という字ですね。こういうのを並べてみますと、ほぼ同じではないかと思えます。そうすると、『寢覚』に限らず他の物語でも、同じ人が書いたもので、非常に似たものがあるということですね。

他にもたしか、田中登先生が伝後光厳院筆の、やはり同じサイズの切で『狭衣物語』を、持っていってらっしゃったと思います。それから、サイズは違いますが『竹取物語』についてもやっぱり伝後光厳院筆で四枚の切が残っている。それから『いはでしのぶ』の写本に伝後光厳院筆のものが残っています。それも字体を調べてみました。似たような字のところは丸をつけてみたのですが、崩し方は同じですね。しかも、この『いはでしのぶ』に関しては袖珍本で、原寸は六・五×八センチです。この小さいところにこれだけの文字を書いているということ、私は古筆切については素人で見当違いな意見かもしれませんが、この筆者が異常な物語好きであるか、

あるいはこういう書写の依頼を受けて専門的に写すようなことをやっていたような人ではないかと考えたりするわけです。

そうしますと、特に古筆切の場合、物語の古筆切は和歌に比べると少ないといわれておりますが、そういう中でこれだけいろいろ出てきますと、ほかにもこの人、書いているんじゃないかと。それから、特別な料紙であれば別ですけど、こういう一般的な料紙であつたら、ほかの物語も同じ字数、同じ行数で写している可能性がないわけではないだろうと考えるんですね。それと個々の切の内容を検討してみますと、どうしても、私が考えたら『寢覚』の内容と合わないというのがいくつかありますので、以上のことを併せますと、もちろん今回の切は『寢覚』のもので間違いないと思いますが、それ以外のものについてはもう少し検討が必要ではないかというのが私の意見です。以上でございます。

▼横溝(司会)・・どうもありがとうございます。つぎに中川さん、いかがでしょうか。

▼中川・・横井先生が今回の切を発見したと初めて聞いたときには、びっくりして、衝撃を受けました、というのが最初の感想。で、これから『寢覚』研究がどうなっていくんだろうというのが、第二の感想です。おそらく横井先生の切は間違いなく

『寢覚』のもので、この点に関しては動かないだろう。その上で、周辺の資料がどういうふうに関連していくかという点に興味があります。

まず、これまで『寢覚』の切ではないかと紹介されてきた切が本当にツレなのかどうか、本当は関係なくてもツレとしてひとまとめにされてしまう可能性もある。だから、その認定は慎重にしないといけないということ。それと先ほど、大槻先生がおっしゃっていたことも関わりますので、伝称筆者について。これはあくまでも、伝称筆者、なので、別に伝称筆者が違ってもツレの場合だつて当然あるわけです。伝称筆者が同じだということだけで、いろいろ比べていっても、それほど意味がないのではないか。意味がないって言ったらい過ぎかもしれない

せんが、そこにはあまりこだわらないほうがいいのではないかと思います。伝称筆者、というのは基本的に、その本があるいはその切が書かれた時代を推定するための一つの目印みたいなもので、同じ伝称筆者なのに筆跡が同じだとか違うといったこととかは、それほど重要ではないかなと思ったりするのです。

まあ、この後どういうふうな話の流れになつていくかわからないですけど、最終的には末尾欠巻部分の復元作業というところに話が進んでいくんですね。私なんかは、こういう新たな決定的な資料が発見されたとなると、復元に関して、また『寢覚』研究が暴走するんじゃないかと、恐ろしいなつて。その暴走をどこまで抑えられるか、資料に基づいて、いかに理性的に考えることができるかが、一番重要なところだと思つて

います。いずれにしても、たった一つの資料の発見でひっくり返るような、常識がひっくり返るような研究に、私としては、これまでも、そして今後も手を出すことはないだろうなというのが、私の率

直な感想です。

▼横溝(司会)・・なるほど。今回の古筆切の発見、それは大変大きいものだったと思いますが、それをどういうふうに関心を受け止めていけばよいのかという問題については、さまざまご意見がありそうですね。久保木さん、いかがでしょうか。今回の古筆切の出現については。

▼久保木・・いや、これはもう大変な発見ですね。大変な発見だと思います。大変な発見であると同時に、これでまた、さらにややこしい問題が増えたな、とも思いました(笑)。だからこそ抜群に面白いんですけれども。

まず今の、伝称筆者の問題ですが、大槻先生がお示し下さった筆蹟資料については、私、今回の座談会用には、チェックしてきませんでした。あらためて、ここで見せていただいた限りでは、似ているものもあれば、ちよつと違うかなというものもあります。ただ、中川さんがおっしゃったように、同じ人が書写したから同じ伝称筆者名が付けられる、ということではなくて、形態とか書式とか、筆蹟とか内容とか、とにかく何らかの基準になるような古筆切があつて、それと何らかの点で共通するところがあれば、基準に倣つて同じ筆者名を付けていく場合が多い、ということですので、後光厳院なら後光厳院で集め



中川 照将——Nakagawa Terumasa
1972年9月福井県生。大阪大学大学院・博士(文学)。皇學館大学文学部准教授。論文に「奥入」を書き加える／切り離すということ(『日本古典文学研究の新展開』)、「淘汰された定家筆本源氏物語」(『古代文学論叢』十八)など。

ていけば、似たようなものが集まるのは、それは普通にあり得ることなんだろうと思います。ただ、それはやっぱり似ているだけであって、今回の問題に直接関係するかどうかは別かな、とは思いますが。

それで、あとでまた伝後光厳院筆断簡の方に話を戻していきますが、少しだけ遠回りさせて下さい。『寢覚』に関しては、ほかにも断片的な古筆資料が残っていますね。国宝の『寢覚物語絵巻』と、その絵詞部分のツレですとか、近年になって発見された、いわゆる『夜寢覚拔書』ですとか。あるいは田中登先生が発見された、伝慈円筆の断簡ですとか。で、今回の伝後光厳院筆断簡の場合でもそうなんですが、その残存状況を眺めていて、何と言いますか、残り方が本当に、ちょっと出来過ぎなのではなからうか、と思えて仕方ないんです。



久保木 秀夫——Kuboki Hideo
1972年2月東京生。日本大学大学院中退。総合研究大学院大学・博士（文学）。鶴見大学文学部准教授。著書に『中古中世散佚歌集研究』、『林葉和歌集 研究と校本』など。

とができます。

ところがこの『寢覚』に関しては、現存部分と一致する本文を持つ古筆資料は、まったく見つかっていないです。すよね。もちろんそれは、たまたまなのかもしれません。が、『寢覚』のどの古筆資料に関しても、現存部分のツレがあるから、『寢覚』の

それらの古筆資料のいずれも、散逸部分に該当するものしか残っていないんですよ。今日我々が読むことのできている、松平文庫本なり、改作本とされている中村本なりの、現存部分の本文に該当するような古筆資料は、一切見出されていない。

これまで私は、中古中世和歌文学の分野で、残欠歌集の散逸部分の復元なども試みてきましたが、多くの場合はまず、すでに作品名がわかっている残欠本や残簡などが先にある。そうした条件が整っているその上で、書誌的な特徴の合致する、出典不明の断簡を見出したりする。で、両者を比較してみると、形態や書式が一致する、またそればかりでなく、内容的にも齟齬しない。よってこの新出の断簡は、先の残欠本なり残簡なりのツレであり、その失われていた部分に該当するものなの

料がひとつもなかったとしたら、それらはとある一作品の私家集の断簡であると判断してしまいかねないと思うんです。ところが実際に本文を調べてみると、師輔集の一部であったり、実頼集の一部であったり、また散逸した花山院御集の一部と推定されるものであったり、あるいはいまだに出典のわからないものもあつたりします。つまり春日切は、一見、同一作品のツレ同士、と判断されかねないんですけれども、実際は、複数の私家集が書写された古写本群が分割されたものだった、ということ。す。

このようなケースが現実的にある以上、伝後光厳院筆断簡に関しても、逸文と一致して、確実に『寢覚』と特定できた今回の一葉を除けば、たとえ同筆同体裁であっても、その他の断簡が本当に、同一典籍から切り出されたツレ同士で、『寢覚』の散逸部分であるのかどうかは、何らかの書誌的な徴証でもない限り、基本的にはわからないんじゃないか、どうにも論証のしようがないんじゃないか、とも思われてきてしまっています。

その一方で、ここ数年、伝後光厳院筆断簡に関しては、それが『寢覚』であるという、決定的な証拠がなかったために、形態面ではなく内容面で、議論が続けられてきたわけですね。従来の復元案と

散逸部分と言える、というのではない。そうではなくて、あちこちの古い文献に引用されている逸文と、運良く重なり合うところが見つかったの、あ、これは『寢覚』の散逸部分に該当するんだとわかった、ということですね。もちろん、それは確かに、そう論証できるんだろうと思います。ただ、逸文との合致を論拠とする場合、方法論的に、たぶんいくつかの問題があるはずですので、これはまたあとで議論になればいいなと思っています。すが、とにかく今回の、伝後光厳院筆断簡も、晴れてそのうちのひとつに加えられることとなった。これは本当に大変な研究成果だと思います。ただやっぱり今回も、これまでの古筆資料と同様に、とある逸文資料と一致したということで初めて、この断簡が『寢覚』であると確定された、ということですね。それはやっぱり、逸文と一致するかしないかという、かなり偶然的な要素に左右されざるを得ない、ということでもあります。で、散逸物語切、未詳物語切の典故を明らかにしていくことの、難しさみたいなものが、今回あらためて、はっきりしたんじゃないかという気がします。

ところで、先程の大槻先生のお話とも関わってきますが、問題の伝後光厳院筆断簡と、これまで同筆と言われてきたも

一致するからとか、近いからとか、あるいはちょっと話の展開が違うからとかで、この一群の断簡は、あるいはその中の数葉は、『寢覚』であるとか、そうじゃないとかという具合に。でも、内容で判断するというのは、大変失礼な言い方ながら、たぶんやっぱり、水掛け論で終わってしまうと思うんです。かと言って、形態面で判断できるのかと言えば、今も述べましたとおり、それも相当に難しい。

そのように考えてみた場合、これはもう、どちらかしかないんじゃないかと思ったりもします。伝後光厳院筆断簡の全部を、ひとまず、完全に別々の作品として扱うか、逆に、もうすべてツレであり、すべて『寢覚』の断簡であると仮定して、研究を進めていくか。その中間というのは、なかなか難しいんじゃないかなあ、というのが、現時点での率直な感想です。

▼横溝(司会)…なるほど、考えさせられますね。

古筆切のツレ認定の問題

▼仁平…ツレの問題ですが、確かにツレの問題っていうのは難しく、何をもってツレとするか、ツレと判断するか、非常に難しいです。すよね。杣だとか、上敷き・下敷きを使っている場合、行間、それから



字高が一致しても、そういうものをほかの作品にも使用する可能性がありますので、それから当然、同じ字でも、いろんなもの、作品を書きますから、それだけでツレだと考えるのは難しい。たぶん、どなたもこれはツレだと確実に判断できるケースというのは少なく、例えば裏写りがあつて、それで確定できたとか、表と裏で奇跡的にそろったとか、それから虫食いの穴が表と裏で一致したとか、また、きょうコピーを持ってきたんですが、陽明文庫蔵『大手鑑』の伝西園寺実遠筆の『源氏物語』真木柱の断簡がありますね。あれのツレを私は二枚持っているんですが、あれは大きな染みがあることで有名な古筆切ですが、私の持っているのも二枚とも染みがあるんです。話が後のほうになると染みが小さくなるんですけど。ここまでくるとたぶん「これをツレではない」と言うのは本当に勇気が要るだろうと思うんですね。また、文字が違ってもツレというのは、よくある。同じ人が書いても書きぶりがだんだん変わってくるというのはご承知のとおりで、写本を見ているとよくありますよね。これはほんとうに同じ人が書いたのかと思うような変化が見られるものもありますし、それから複数の人が書いているのもご承知のようにありますし。ですから、何をもってツレとするかというのは本当

に難しい問題だろうと思います。

私が『寢覚』の末尾欠巻部の山場の場面の一部だといっている伝後光厳院筆の断簡を、『寢覚』の末尾欠巻部の断簡だと、なぜ考えたかといえます。こんな理由です。まず注目したのは、さつき申し上げましたように『古筆学大成』に写真が載っている切だったんですが、あれはそれだけで『寢覚』だつていうふうに考えられるたしかな根拠っていうのはほとんどないだろうと思います。学生時代に『寢覚』を読んだときの印象っていうか、文体とか、そういうもので。これは『浜松中納言』でもないし、もちろん『更級』じゃありませんし。だから、もしかしたらこれは『寢覚』じゃないかと思つたんです。学生時代以来関わつてきた作品のことが頭にあつたんです。それで、先ほどお話ししたような経緯で潮音堂の目録でこの断簡を見たときに、『寢覚』だと思つて、内容を見て、末尾欠巻部のこれまでの推定と違う内容に、「やはり」と思つたわけです。

その後でいろいろ調べまして。話に出ましたが、大阪青山短大に入つて、後に重要文化財になつた『夜寢覚抜書』、装飾料紙に散らし書きにした、あれとの関係が気になりました。中間欠巻部も、それから末尾欠巻部も背景にした内容になっていきますから、抜書を書いた人は当然、それ

を見ていたわけですよ。何らかの形で見ていたわけです。そうすると、その人が写したこの写本が『寢覚』の欠巻部である可能性が、またその分、大きくなるんじゃないかと思つて、文字を一字、一字、同じ大きさにコピーしまして対照したんです。貼り付けて一覧にして。それで見たところ、判断が分かれるかとも思います。私はこれは同筆だろうと思つたんです。だから、この文字を書いた人は、それが後光厳院である可能性もあると私は思います。その人は当然『寢覚』の末尾欠巻部を見ていたと。

それから、まだあるんです。極札の問題です。この一連の伝後光厳院筆の、もしかしたら『寢覚』末尾欠巻部の断簡ではないかと思われるものの多くは、極は朝倉茂入、二代目茂入になつているんですね。そうではないものもあるんですが。このことは論文にも書いたんですが、これはたぶん茂入が写本を持っていた、ある程度まとまつた形で持っていたんだらうと。当然、古筆見ですから『手鑑』の調整を頼まれると、切つて、極札を付けて、手鑑に押し売るとか、あるいは古筆切のまま売るとか、そういうことがあつて。たぶんこれは全部持っていたのではなくて、さつき、なんで末尾欠巻部のところが出てきて、知られているところが出てこない

かというお話がありました。問題はそこなんだろうと思うんですね。つまり茂入が、失われた部分、末尾欠巻部の写本を、その部分を持つていて、それを切り売りしていった。だから、末尾欠巻部しか出てこないし、それから茂入の極札が付いたものが多いんだろうと思います。

実は、そのことは、きょうは出席なさつていませんが、池田和臣さんと前から話をしています。『いや、これは必ず出てくる』と池田さんは言つていたんですね。私はもそう考えているんですが、茂入が切り売りしていつて、ずっと末尾欠巻部をどんどん切つて、たくさん売つているとすれば、これは鑑定を頼まれて極札を付けたということじゃなくて、自分で切つ

て付けたんだろうと思うんですけどね。

既に今まで知られている、末尾欠巻部の歌だとされるものが、これは歌数が少ないですから可能性はそんなに大きくないと思つていたんですが、出てくるだろうという話をしていたんです。そうしたら、やはり出てきた。

それから、さつき久保木さんが出つていまして、なんで末尾欠巻部の断簡しか出てこないのかということですが、その理由はいま言つたようなことだろうと思ふんです。『寢覚』の末尾欠巻部の断簡だと考えた理由としては、今、お話ししたようなことも根拠として考えていました。それから、語彙とか語法も『寢覚』の現存部分、それから『浜松中納言』など

とも比較をして、『寢覚』にしか出てこないものとか、ほかのものにあまり出てこないもの、そういう語法が見られるんじゃないかということも論文の中では、かつて書いたことがあるんですが。そんなことも根拠にして考えております。

▼横溝司翁…仁平先生は御架蔵の切が『寢覚』であることを、当初から確信していらつしやつたわけですね。そこからすべ

て始まつていて…。

▼久保木…私も、この伝後光厳院筆断簡の残存状況に関しては、いま仁平先生がおつしやつたとおりかな、と思います。本来の、末尾欠巻部分がどのぐらいの量あつたのか、一帖なのか、二帖以上に及んでいたのか、それについてはよくわかりませんが、そのうちの二帖の、全体か一部分だけが残つていて、それが分割対象にされたということだろうと。仁平先生もお書きになつていましたが、初代古筆了佐の極札のある断簡がありますので、江戸時代も相当早い段階で分割され始め、その切り残しがまたほかに伝えられ、次から次へと分割されていつた、ということだろうかと。

▼仁平…茂入が譲られたんだろうというふうには私は推測しています。

▼横溝(司会)…そこから、もう一気に切られていつて…。

▼仁平…『寢覚』の最後の部分、つまりこ

の物語の終わり方が分かるようなところが出てくればいいという期待もあるんですが、ただ、私はそのことについてはあまり期待できないという気もしています。というのは、切り売りするときには、途中や最後を切る切り方もあります。たぶん前のほうから切っていたんじゃないかと。最後のほうは残っているか、どこかで失われてしまっている可能性があるんじゃないか。それから、現在残っている部分というのは意外に接近した箇所じゃないかと思っているんです。

▼横井…例の、あの大四半切の河内本の切もそうですね。

▼仁平…やっぱりそうですね。

▼横井…薄雲の巻の。

▼仁平…近接したところ。途中をばらばらに切ることもないわけではありませんが、普通は古筆見が商売にするときには、売れるもんですからね、少しずつ切つて、売つて。残つたところをめちゃくちゃには、あまりしないだろうと思いますので。

▼久保木…この断簡、たぶん元は列帖装だと思ふんですが、その場合、括りの単位で残存して、切られていく可能性はあるのかもしれないですね。もちろんひとつの括りの中でも、前寄りの丁と後ろ寄りの丁とは、物語内容もそれなりに進展しているはずでしょうけど、それでも括りの単位、

括りの範囲内での内容的な近さ、というのは考えてみてもよいかもしれません。

▼仁平…そんなに遠くはないと思うんですね。

▼横井…今回の実践が買い求めたものには、——写真で見えてお分かりいただけるかどうか分からないんですが——、右の下の隅に手擦れがあつて、汚れが見えるんです。これがそうですね。

▼横溝司会…はつきり出ていますね。

▼横井…実はそれに気を付けると、手擦れか、あるいは染みかと思うんですが、池田さんのものが、やはり左下が汚れています。

▼仁平…染みかもしれませんね。

▼横井…『墨跡彙考』もやはり左下に汚損があります。そのような目で見ると、何か一連の関連性があるように見えてきます。少なくともこのあたりは一致しているんじゃないか。それから、永青文庫の手鑑に押された切も、染みのような汚損が左下にあります。

▼仁平…染みでしょうね、これ。手擦れではないですね。

▼横井…そこに注目すると、ここに写真を並べた限りでは一連のものと見ていいんじゃないかと思つたんです。

▼仁平…さっき、例の西園寺実遠筆の『大手鑑』に押されている『源氏』の真木柱

の切の染みの話をしましたが、やっぱり横井さんがおっしゃったように、これ、染みだろうと思えますね。

▼横井…染みだろうと。手擦れもありますが、湿損ですね。

▼仁平…これは私が持っている伝後光厳院筆の切の実物ですが、これもここにちよつと小さいが、これも染みかと。

▼横井…これ、こつち一行、切られていますか。

▼仁平…二、四、六、八、九行ですから。

▼横井…もう一行あつたとしたら、このあたり。

▼仁平…これはたぶん染みですね。

▼横井…染みの端つこということでね。

▼仁平…ええ、一致しますね。

▼横溝(司会)…ただ、相剥ぎですから丁の裏と表にシミがきますね。実際、左になつてゐるものもあれば、右になつてゐるものもあるはずで、どちらがシミで手擦れでしょうか。

▼仁平…手擦れでこまでは、普通いきません。見たことないです。

▼横井…最初、『墨跡彙考』のものを見ていて気が付いたんです。ひよつとして実践の切とつながるのかなと思つて裏表に見てみただけですけど、残念ながら文章はつながらない。

▼仁平…論拠の一つが、横井先生の話で

加わる可能性がありますね。

▼大槻…こちらは染みでしょうが、これは、でも……。

▼横井…写真ですからね。現物で見たほうがいいと思います。この写真は、実はちよつと強調しています。パソコンで修正しましたので若干濃くなっているかもしれません。

▼大槻…ただ、物語の写本の場合はそういうところに付くのは、手擦れでも、あるんじゃないですか。例えば、『木幡の時雨』の写本などでも、この位置にやつぱりかなり濃く出ているんですね。

▼横井…隅だと、どうしてもね。

▼仁平…ただ、横井先生が報告された切は、手擦れでは、ここまでひどくは。何百人も汚い手で触れば別ですが。これだけ出ているっていうのは染みの可能性が大きいでしょうね。手擦れでこういうの見たことがない。

▼横井…最初、私、丁の端だと思つたんです。列帖装の。ところが、どうも右端の方が切られている可能性が強いので、ノドの綴じ糸の方がこう汚れているんじゃないか、と思つたのですがね。

▼久保木…それは両方とも言えそうですね。で、ちよつと分からないですね。

▼仁平…染みがある可能性大きいと思いますね。



▼横溝司会…いずれにしても、そういうのが、ある意味、ツレかどうかというのを認定していく、切られる前の状態がそのまま残っている痕跡とすれば、ある程度

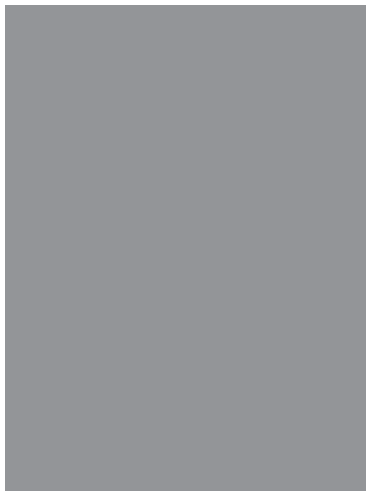
そういうものを手掛かりにして認定していくという方法もあるかと思ひますけど。ツレの認定の問題についてはいろいろ議

論が白熱しそうですねですが、いずれにしても今回対象にしている伝後光厳院切については、もうほとんど、まず雰囲気とか、サイズとか、ともあれいろいろな側面から見てもまず同種の写本のものだろうというふうで紹介されたり、報告されたりしているわけですね。じつは今回の座談会では、その一連の後光厳院切のツレなのではないかと思ふこともできそうなものについて、久保木さんが新しい情報をお持ちくださいましたので、まずそれを拝見した上で議論を先に進めたいと思います。

新出「伝後光厳院筆切」の紹介

▼横溝(司会)…今回の座談会では、これまで議論に挙げられていた伝後光厳院筆切が果たしてツレとして、これから先『寢覚』の欠巻部の資料として扱えるかどうかという非常に大きな問題がテーマになつてゐるわけですが、このたび久保木さんから、これまで知られていなかった切が存在することをお調べいただきましたので、そのことについてお話しいただけますか。

▼久保木…以前、久下裕利先生と『平安文学の新研究 物語絵と古筆を考える』(二〇〇六年九月、新典社)を共編させてい



ただいた時、ちょうど仁平先生のご論に
関する議論が巻き起こっていましたので、
とりあえず情報提供だけでもと思い、その
段階で把握していた、ツレとみられる二葉
を翻刻紹介しておきました。ただ、その紹
介の仕方が中途半端でしたので、まずこ
れらについての補足をおきたいと思
います。一点は、東京大学史料編纂所蔵
写真帳「古筆手鑑」(六一七・〇二二三)
の中に写っていたものです。「おぼしなぐ
さめたる」云々と始まる一葉です。最初翻
刻した時は、寸法をはっきり示していま
せんでしたが、同じ手鑑のほかの断簡や、
一緒に写されているメジャーなどを参考
にすると、だいたい縦一七cm、横一五cm

程度のもので、これまで知られて
いる分の断簡と齟齬はしないと思います。
もう一点は、善光寺大勧進蔵の貼交屏風
に貼られているものです。これは「善光
寺大勧進本坊宝物集」(一九九九年四月、郷
土出版社)という図録に、小さいですけ
ど図版が掲載されています。解説による
と寸法も、縦が一七・一cm、横は六行分
です。八六cmです。やっぱり形態・書式・
筆蹟の面で、同種の断簡と認めてよいの
かな、と考えています。

その後もずっと、ツレはないかと気
にかけてはいたのですが、なかなか見つ
かりませんでした。そうしたところ、先年、
松本文子氏が、西尾市岩瀬文庫蔵の「芳翰

中に歌一首が記されていますが、今のと
ころ他文献には見出せません。これも「寢
覚」の一部であれば、新出の一首という
ことになりますので、貴重ですね。

それと、鶴見大学の高田信敬先生に、
今回このような座談会の企画があるとい
うお話をしたところ、何と南園文庫にも、
未紹介の一葉が蔵されていることがわか
りました、ものすごくビックリしました
(笑)。どうぞご自由にお使い下さい、とい
うありがたい言葉をいただきました。紹
介させていただきます。縦一七・一センチ、
横一四・七センチで、かなり日焼けがあり
ますが、やはり同種の断簡とみてよさそ
うです。

その場合、これはぜひとも内容自体を、

古筆手鑑『墨跡彙考』所収
「伝後光厳院筆切」(専修大学図書館蔵)

専門の先生方にご検討いただきたいと思
うのですが、この南園文庫の一葉、すでに
紹介されている断簡のうち、専修大学図書
館蔵の手鑑『墨跡彙考』に貼られている
断簡の、その直前に該当する可能性はな
いでしょうか。前者の「二行目には「す
こしまとろませ給へる御ゆめに」とあつ
て、最後は「御心地」で終わり、後者は「す
るほとおほる、なみたにうちおとろき
たれは」と始まるので、続き具合がよいの
ではないかと。ただ、きちんと読み込ん
ではいけませんし、先程問題になった染み
が、南園文庫の一葉にあるのかないのか、
あるんでしたら、「墨跡彙考」の一葉と対
称形になっていないとおかしいんですが、
日焼けのためかどうなのか、ちょっと見
分けが付きません。

ともあれ、以上の新出二葉についても、
検討材料に加えていただければと思いま
す。

▼横溝(司)さん、どうもありがとうございます。
この座談会で四点もの同種の古筆切を
写真付きで紹介していただき、二点が新
出ということですからびっくりです。すば
らしいです!こうしてみると、やっぱり
ある意味、同形態とまず見なしてよいと
いうような古筆切、この伝後光厳院の切
についてはまだ相当量が眠っている可能
性がありますね。とにかく集められるだ

け情報として集めて検討してみないこと
にはなりません。そのうちの一枚が『寢
覚』であるということはもう今回、横井
先生の紹介で明らかになったわけですが、
それによってほかのものが『寢覚』で同
種の切であるという可能性も俄然高まっ
てきていると。また一方では、やっぱり
ほかの物語、全く同形式、同様式、同筆の、
それでいながら『寢覚』でない物語が入っ
ているという可能性もあるわけですので、
いずれにしてもこの一連の伝後光厳
院の切をこれからいろいろ探索して、
その中で詳しく付き合わせて、一つには
実践切が基準になるのかもしませんが、
そこからいろいろ『寢覚』の末尾欠巻部
の断簡である可能性を探っていく上では、
俄然後光厳院筆の資料の価値が高まっ
てきた、注目されてきたというところでは
ないかと思えます。

あと、もう一つは今、久保木さんが紹介
してくださったものに加えて、これは仁平
先生が論文の中で少し、何度か取り上げら
れたことがございますが、東北大学の切で
すね。これについては今回私が写真を持っ
てまいりましたが、コメントについては
仁平先生からお願いしたいと思っていますが、
いかがでしょうか。

▼仁平さんでは、私から。この後光厳院筆と
いう極のある、東北大学の狩野文庫に入っ



伝後光厳院筆切（東北大学附属図書館蔵）

ている切のことなんです、実は複数の方から狩野文庫に未整理の古筆切、色紙が二箱あるという話を聞きまして、それでその二箱を調べてみた。狩野文庫の切といつても、いわゆる名物切っていうのはあまりないんです。歌集、物語の平安時代書写の切っていうのはありませんで、確かなかったと思いますが。ただ鎌倉時代の貴重なものはございます。伝後光厳院筆のものでいいですと、もちろん『源氏』も『狭衣』も入っていますし、その中に見てすぐ「これは自分が持っている伝後光厳院筆の切のツレだ」と感じた切が一枚ございました。実はその段階では狩野文庫の古筆切はまだ未整理でして、今、申し上げましたように二箱に順番も怪しくなるような形で、ただ入っているという状態でござい

まして、その内容がどういふものなのか、何枚あるのかということも記録になかったんです。ですから、この状態で公表すると混乱が起きると思ひまして、最初のうちは「公共機関蔵」という形で存在を示すことにさせていただいたわけですが、後に図書館のほうである予算を取りまして整理できるということになったものですから、その段階で東北大学附属図書館の狩野文庫に所蔵されている資料だということも明らかにしたわけですが、それについて、その古筆切を最初に見ていろいろ調べた責任上、私がそれについて少し詳しい報告を書こうと思ひていたんですが、三年前に三・一一の大震災がございまして、その資料を入れたファイルが、私が不在のときに家族が片付けたものですから、どこかに行つてしまつて。物置の百何十箱がある段ボールを全部ひっくり返せば出てくる可能性はあるんですが、出てこなくなつてしまつたんです。今回刊行される論集に、久下さんにいったんは執筆するという約束をしながら、約束をたがえて原稿を出さずに終わつてしまつたのは、実はそういう事情でして。またいづれ改めて資料を捜して報告したいと思ひております。いつになるかわかりませんが、ということ、東北大学の附

属図書館、狩野文庫に、これはもう明らかに私はツレだと思ひていますが、その一葉がございします。

▼横溝(司会)・・・わかりました。その内容検討も含めて『寝覚』である場合はどのような場面であるか、それについては仁平先生のほうから論考を発表される予定があるということ、それをお待ちしたいと思ひます。

以上、ここで問題になるかと思われる後光厳院切についてはすべて十四点が集まつているわけですね。そのうちの一つが『夜の寝覚』であることが明らかになつていふというわけで、しかもそれが末尾欠巻部分の、恐らく寝覚上が、場所は白河院でしょうか、そこでもつて眺めながら歌を詠むというようなシーンであるわけですが、と同時に、その内容的に極めて興味深いところがありまして、これまで推定されている復元試案というんでしょうか、試論というんでしょうか、そことまた矛盾するわけではないですが、そこにどう今回明らかとなつた寝覚切の情報を加えていけばいいかという問題が出ていふかと思ひます。

それから今、久保本さんが指摘されましたが、このツレ自体がやはり同種のものであつたという場合、それが本文としてどうつながつていく可能性を持っているのか。

完全な列帖装の本の形になつていなかったにせよ、ある部分の括りが存在して、それがあつた時期分割されたとなれば、この括りの外側に行けば行くほど本文としては距離が離れてしまふわけですが、しかしこの『寝覚』みたいな作品の場合は、括りが同一であればそれほど大きく内容的にもかけ離れてこないということもあり得るんじゃないか。そういうことも含めて、とにかくさまざまな可能性を探つて検討していく必要が出てきているわけですが、いかがでしょうか。今、久保本さんから本文が続いて、これが一つの連続した場面として読めるという可能性も指摘されたわけですが、ほかに何か、まずこの古筆切の中でのいろいろお気付きのこと、お考えになつたことがあれば自由発言していただければと思ひますが、いかがでしょうか。

▼久保本・・・それは、今回の十四点について、すべてツレであると仮定した上で議論する、ということになりますでしょうか？

▼横溝(司会)・・・そうですね。いや、もちろん様々な仮定がなりたちますから、希望的観測も含めてのことにはなりますけどね。

▼仁平・・・私は逆に全てツレだということに仮定していいかどうかについていうことになる、仮定ですから、仮定は仮定でいいんですが、必ずしもそうはいかないんじゃないかと思ひます。

ないかとも思ひます。別のものが入つていて可能性も考えられるらうと思ひますね。それから、先ほど横溝さんがおっしゃつた従来復元されている内容ですが、これは結局、残つていふいろいろな資料で復元した、いつてみれば点と点をつないだ、推測をかなり含んでいる復元なんです。最初にお話ししました阪倉さんの、私が学生時代に疑問に思つたという、あの推定もそういうものに過ぎないんで。それから現在出ている論文についても実はかなりの部分はそういう点と点をつないでいつた、そういうものだらうと思ひます。ですから、逆にこの古筆切の内容が『寝覚』だと考えたときに、そういう推定と矛盾したときに、どうしたらいいか。推定のほうが誤つていふという可能性を当然考えなければいけない場合があるだらうと思ひますね。

▼横溝(司会)・・・具体的にはどのような……

▼仁平・・・例えば私が入手した断簡ですが、これには女が仮死状態で、院と呼ばれる場所に連れられていつて、その後、息を吹き返したと。こういう内容が、『寝覚』以外のものと同じ話型のものがあるというの、形式論理としてはありえますが、果たしてそういうディテールまで一致する物語つていふものがあるかどうか。強いてそのような物語を想定しなければいけ

ないつていふ、そちらの不自然さのほうを考へるべきじゃないかと思ひますね。これだけいろいろな点で『寝覚』につながつていく可能性があるとすれば、形式論理で「もしかしたら違ふかもしれない」といふのはどうでしょうね。やはり『寝覚』だといふふうを考えるのが自然だらうと思ひますね。一〇〇パーセント間違いないかどうかについていふことになると、大体作品の読みだつて、もつとあやふやな、いいかげんな、あるいは誤つたものが多いわけですが、だからといつて、読みの研究をしなかつたら文学の研究はできない。これだけ材料がそろつてきたら、ある程度確実性を持つと判断されるものについて『寝覚』と考へて、それで従来推定、復元といふものを逆に見直すという、そういう作業が必要になつてくるんじゃないかと思ひますね。

▼横溝(司会)・・・そうですね。それで新しい資料で、もしそれが『寝覚』の本文であるという手応えが、やっぱりある意味いろいろな語法とか、表現とか、あるいは引歌的な表現とかも入つてくるかと思ひますが、そうしたところから、これは『寝覚』だといふふうに見られるということであれば、それからまた復元試案といふのをどんどん更新していくという可能性もあるわけなんです。ともあれ、この十四点の『寝

「覺」の古筆切を含む伝後光厳院切が『寢覺』の趣を持つている、あるいはこれまで欠巻部について考えられてきたストーリーの一部分に相当するものだというふうにお感じになるかどうかというのは、さまざまな感があるのかというふうに思うんですが、そのあたりでどうでしょうか。

――末尾欠巻部の「復元」とは――

▼久保木…ただそのように考えていく場合、現在知られている『寢覺』のすべての伝本、すべての古筆資料、すべての逸文資料、すべての関連資料が、たつたひとつの、ほぼ同一本文の『寢覺』に発していたということを、まず大前提としなければならぬんじゃないかと思えます。が、でもそれは本当に、大前提にできるんでしょうか？以前、『源氏物語』の「菓守」巻について考えた時に、つくづくと思ったんですが、中古中世の物語に関しては、やはり、どの物語に関しても、程度の差はあれ、それぞれにいくつかのヴァリエーションがあった可能性があるわけですよね？だったら『寢覺』の場合でも、伝後光厳院筆断簡の本文と、例えば『無名草子』に引かれている逸文と、また例えば『風葉和歌集』に引かれている逸文の、いずれも



が、すべて同一種類の本文に基づいていたということ、無条件に認めてしまつてよいのかどうか。むしろそれぞれ別々だった可能性だって相応にあるわけで、実際、そのあたりの問題を、中川さんご論文で指摘されていますよね。

▼中川…はい。現に『寢覺』には新全集

まず疑問の一つとしてあります。

あとは先ほどの仁平先生の話と同じで、そもそもこれまで提出されてきた復元案が本当に正しいものと言えるのか、そこも実は重要なところだと思うんですね。例えば、中間欠巻部分の復元が何となくうまくいっているのは、巻二の終わりとか巻三の冒頭部分、つまりお尻と頭が分かっているということ。そして何よりも中村本が残っていた。そうした幸運が重なって、ある程度の復元ができたのですし、妥当性についての議論もできたわけですね。「それだったら、巻二と巻三がうまくつながるね」というように。それに対して末尾欠巻部分に関しては、お尻はあるけれど頭はない。しかも中村本のようなものもないわけです。例えば今、私たちが『拾遺百首歌合』とか、そうした断片的なデータだけで中間欠巻部分をあそこまで忠実に復元できるかといったら絶対できないと思うんですね。それができたのは、あくまでも中村本があったからです。これまで末尾欠巻部分の復元について議論が錯綜しているのは、本当は全然関係ない場面であったかもしれないのに、なんでもかんでも自分たちが知っている事件や出来事に全部引き付け過ぎてしまつていくからではないかと思うんですね。そういうところも多々あるのではないかと

て私は思っています。

例えば、今回の横井先生の切について、横井先生は、女三宮が何かを悩んでいる、「うちながめ」ている理由を、冷泉院によって真砂君との仲を引き裂かれたことにあると解釈していらつしやいますけど、本当にこの記述からそのことまで読み取ることができるのか疑問です。確かにこの切に出てくる「しらざりし」の歌は、真砂君が北山に籠もつたことを聞いた寢覺君が詠んだものである。このことは『風葉集』や『拾遺百首歌合』『拔書』からもわかる。もちろん、先にも言ったように、『風葉集』たちがいずれも同じ『寢覺』を読んでいたかどうかかわらないという問題はありますが、それはさておき、とにかくそういった状況で寢覺君が「しらざりし」の歌を詠んだということはある。ただ今回の切だけを読むと、そもそも女三宮の悩みというのは、真砂君に関するものというよりも、彼女の母承香殿女御に関するものではないかとも思えるんですね。寢覺君は、真砂君が北山にこもってしまったことを聞いた。そこで、寢覺君は「ああ、子どもというのはこんなに親のことを思うものなんだな」と思っている。すると、横にいる女三宮も悩んでいる。寢覺君は「ああ、この子も、きっと母親のことを思い悩んでいるんだろうな」と思っている。

などの現存本と、中世王朝物語全集などの中村本という二種類の『寢覺』があるわけですから、すべての資料が、同じ『寢覺』から派生している、もつと具体的に言えば、現在一般的に読まれている現存本の『寢覺』から切り出されていると考えるのは、あまりにも安直すぎるのではないかと思えます。それこそ『無名草子』や『拾遺百首歌合』なども、同じ『寢覺』を読んでいたかどうかさえ確実ではない、学問的に実証できないのではないかと思います。私の感覚で言うと、現在の中間欠巻部分と末尾欠巻部分の復元というのは、結局、書名が単に『寢覺』とあるものを寄せ集めたもの。ポテトチップスとかだつたら「うすしお」とか「コンソメ」とか「のりしお」とか、いろんなバージョンがある。商品名は同じ、ポテトチップスだけども、味は全く違うものなのです。現在の復元案というものは、そういったものを全部混ぜて作っているような感覚が、私にはあるんです。本当はそれぞれ味が違うのに、味を無視してとにかく「ポテトチップス」とあるものを一緒にしちゃつた。なんとなくそうした寄せ集めのもののように感じます。本当は同じ『寢覺』ではないかもしれない。そうしたものを使って復元すること自体が、そもそも本当に可能なかどうかというところが、

初めてこの切を見た時、そういう場面だと私は思ったのです。というのも、この切には「母の女御の」って書いてあるでしょ。あえて「母の」と書かれているということは、そこにはやはり女三宮の「母親」の存在が意識されているような気がするのです。実は、この時、女三宮の「母親」にも何らかの事件が起きていた。しかもそれは女三宮と離ればなれになつてしまふもので、例えば死んでしまったとか、そういった出来事が起きていたのではないかと。少なくとも、真砂君と寢覺君、女三宮と承香殿女御という二つの親子関係というものが土台としてあつて、そうした状況の中で寢覺君が「そもそも子どもというのは親を思うものなんだな」って思っている場面だ、といったふうにも解釈できたりもする。

▼横溝(司会)…こだけ見るとね。まず、こだけで判断できる。

▼中川…そう、こだけの判断です。つまり、私が何を言いたいかというと、女三宮が出てくるっていうと、なんでもかんでも自分たちの知っている出来事、こで言えば勘当事件なんです、いつもそこに引きつたくなってしまうんです。でも、これまで言われているように末尾欠巻部分はかなり長い内容を持つていて、当然のことながら、その中には、私たちの

* 4 久保木秀夫「『源氏物語』菓守巻関連資料再考」(『平安文学の新研究』2006年、新泉社)

* 5 中川照将「『夜の寢覺』研究史の課題と展望——現存『寢覺』は果して〈原本〉なるか」(『日本古典文学史の課題と方法』所収、(2004年、和泉書院))

知らない出来事もたくさん起きていたはずです。そんなふうにいるんな出来事が起きていたはずなのに、なぜかごく限られた出来事のものとして考えてしまう。それっておかしいと思いませんか。本当は関係ない出来事かもしれないのに、同じ出来事に結びつけてしまう。根本的にそこが問題だと思っています。だから今回の新出断簡だけじゃなくて、今までの資料も読み間違っているところはあると思います。

▼横溝司会…そのことについては、もう大槻先生が、『無名草子』の「死にかへるべきほふ」というところから始まって、その部分の読み方からして、またその文章の、一連の文脈の解し方ですね、何を一体あそこで『無名草子』はやり玉に挙げているのかということも含めて、とにかく『寢覚絵巻』の詞書も含めて、すべてを逐語的にまずは正確に解釈するところからやり直さなくてはいけないということをして、今回の本のご論でも強くおっしゃって、それでどちらかというと慎重な態度を取られていたかと思うんですが、いかがですか。

▼大槻…「(寢覚)ではないか」と思われる資料をあこれ使って、復元をやってしまったと、これはもう收拾がつかなくなると思うんです。ですから、まず最初に、最低限、当該資料から分かる情報という

のを全て出さないと駄目だと思うんです。例えば今回、久保木先生が最後に出してくださった、「御ゆめに」で始まる切についてですが、これは確かに夢というキーワードでは、専修大学の『墨跡彙考』と共通はしていますが、両者は夢を見た人が違うと思うんですね。今回、久保木先生が提供してくださった切の、この「夢」というのは誰が見ているかっていうところから、解釈について見て行きますね。

▼久保木…はい。

▼大槻…まず聖の御筈(しるしのみはこ)という語が出ていますね。この「聖の御筈」というのは恐らく勾玉を入れる箱なわけです。この「聖の御筈」が御枕上にあったのを、「わたりにし物、まだこ、にこそありけれ」とあるところから判断すれば、この夢を見た人というのは恐らく院なんですね。既に譲位した後で、「聖の御筈」というのは帝のところに行っているはずなのに、まだ自分のところにあったという夢をここで見ているわけです。そしてその筈の中に玉があったと。この玉っていうのは恐らく後に皇位を継承するであろう御子が生まれるっていうことの暗示だと思うんですね、玉の夢だと物語の場合、懐妊がお約束になってきますから。これからこの相手の女性が懐妊するであろう子が、後に皇位を継承することを暗

示する夢であると思うんです。そして「この人にたてまつり給へば、——つまり夢の中で院がこの相手の女性に玉を奉ると、その女性が「いいえ、私には関係ないから中宮にこれを差し上げましょう」と言っ

て懐にしまったという夢なんですね。そうすると、中宮が恐らく御子を生むであろうと、この女性は思っているが、たぶんこの後、この女性が院の御子を生むことになるのだらうと思うんです。

そうしますと、この夢は院の見た夢であって、しかもこれから生まれてくるのは男の子ですね。そうすると、これを例えれば『寢覚』の中に据えて復元を行った場合、寢覚上は、『絵巻』詞書によって女兒を産んだことは分かっていますので、女兒を産んだと思ったら実は男児だったという話の後についてくるんだ、みたいな復元になっ

てしまうと思うんです。これはあり得ないので、そうすると、この男の子を産む夢を見た院の、この話っていうのは『夜の寢覚』のどこにも据えられないような内容だと思

を、男君が夢で見るとい——あれに非常に似たような手法ではあるんですけど、もちろん夢を見た人も違うし、夢の中身も違いますから、この切の場合は、『寢覚』にあった夢と似たような手法を使って、別の物語の中でこういうようなものを書いているのではないかなと。

話の展開としては、これを見ただけでは『寢覚』のものに似ていますが、先ほど申しましたように、産んだ子の性別が違うから、これは『寢覚』ではあり得ないのではないかな。そうすると、『寢覚』的なストーリーの物語というのは当時多かったと思うので、そのうちの一つではないかというのが私の考えですね。

▼横溝司会…形態が非常に似ているが、この切についてはちょっと違うのではないかと。

▼大槻…はい。単に、語句などの手掛かりに似たようなものがあるからという理由で、これを『寢覚』に入れてしまうと、また復元内容が混乱してしまうと思うんです。

▼中川…大槻先生、ちょっと質問です。結局、じゃあこれは違う切だっていう根拠となっているのは内容が合わないからということでもいいんですかね。

▼大槻…そうですね。

▼中川…現在の復元案の。

▼大槻…はい。

▼中川…でも、現在の復元というのはあくまでも一部分であって、全体については全然分かっていないんですね。それなのに、内容が合うとか合わないかっていうのは、どこで判断するんですか。

▼大槻…この御子が生まれるっていう、こ

の話を例えば脇、サイドのストーリーであると考えたと、私が物語を読んできた経験からしますと、こういうものをサイドの話に入れていくというのはちょっと考えにくいんですね。こういうものは、女主人公であるとか、それに準ずるような女性の産む御子の夢であるはずなんです。ですから、例えば『寢覚』の中で、尚侍とかが御子を産むときに院がこんな夢を見

るかっていうと、物語の展開からしてちょっと考えにくいと思うんですね。そうすると、これを『寢覚』の中に入れてみようとしても、どこに入れてられるかっていうのを考えますと、どう見ても入らないと私は思います。これを逆に復元に入れてしまつて、じゃあこういう場面もあった、ああいう場面もあったって入れていくと、いろんな物語の恐らくいろんな場面が混

入してきて、もう復元の内容というのがそもそも誤の分からないものになってくると思うんですね。

▼中川…私が、今までの復元案がどこまでちゃんと分かっているのかと言ったのは、つまり本当は私たちの知らない展開があったかもしれないのに、そこに關してはどう考えるのかということを言っているわけです。新しい古筆切が出てきた時に、一番重要になるのは、切の大きさとか筆の感じとかっていう「形式」の間



題ですよね。それによってツレかどうかを判断する。今問題になっているのは「内容」ですよね。でも、そもそも内容なんてわかんないから、それを根拠にすることはできないと私は思うんですけど。

▼大槻…分らないっていうのは……。まず現存部分をよく読み込んでみないと、今後どういう展開になるかっていうのは全く予想が付かないことはないと思うんですね。やっぱり伏線的なのがいりい入ってきますから、そうしますと現存部分を基に大体こういう展開だろうっていうことはある程度予想は付くと思うんです。

▼中川…じゃあ、こういう質問についてはどうお考えですか。現在『寢覚』は、巻一から巻五となっていますよね。そして末尾欠巻部分は、それ以降のことを描いている。ということは、『寢覚』という作品は、現在の巻五までではなく、末尾欠巻部分の終わりまでが一つの統一体として一氣に書かれているものだという認識なんですかね。

▼大槻…私はそう思っています。

▼中川…例えば『源氏』とかだったら光源氏を描いた正編と彼が死んだ後の宇治十帖という続編というのがあって、それらが『源氏物語』という一つの作品になっているわけですよね。こんなふうに『寢覚』についても、巻一から巻五は正編、末尾

欠巻部分は続編として作られているという可能性はないですか。

▼大槻…私は全くそうは考えないですけど。

▼中川…それはなぜですか。

▼大槻…それは『寢覚』の現存部分で寢覚上がこれからどうなるかっていう手掛かりは幾つか出されていると思うんですね。まず物語の一番最初に「国王まで奉り給ふばかり」の予言がある。やがて帝が接近してくる。そうすると、その予言の実現に向けて話が進んでいっているとしか私は読めないわけです。その後に続編として、もし仮に何かあったとしても、少なくともそれは現存部分からの続きでない。誰かが作ったとか、あるいは後からくっつけたにしても、それは少なくとも最初から続いている『夜の寢覚』の物語の、本筋には入らないものであると思うんです。そうすると、そういうものを例えばこの現存部分の続きの、ある部分に入れて復元していかというと、それはやっぱり入らないものだと思う。だから、仮にこれが例えば続編として書かれていたとするならば、それはそれでいいんですが、少なくとも現存部分の続きとしての復元の中にこの切は入らないことですね。

▼中川…「続き」としては入らないというのは、うーん。よくわかりません。

▼久保木…あの、私、今さら言うまでもないんですけど、『寢覚』に関しては、もうまったくの素人なんです。ですので、今回の座談会に向けて、にわか仕込みをしていまして、いわゆる改作本の中村本が、ものすごく面白いなと思ったんです。何よりビックリしたのが、原作本と比べてきた松平文庫本なんかと、歌がもう全然違うんですね。巻一冒頭の、一首目だけは同じですけど、あとはもう、同じ場面で詠まれているはずの歌であっても、本当に違うんですね。たまに二句や三句や四句程度、似ている歌も見出せるんですが、でも違うんですね。ところがそれでも、大体の筋は合っていると。後半に行くにつれ、中村本の方の、場面々々の分量が、少なくともっていく傾向があるみたいですが、とにかくそんなふうに、ずっと歌を突き合わせていってみますと、松平文庫本の巻四の途中、『新編日本古典文学全集』で三五八ページの歌あたりまでは、歌は違っていない、場面としては大体重なり合っていて、またそれぞれの場面に即して、歌が伝えようとしている内容も、ほぼ同じになっているように、大局的にはみえました。

ところがですね、その三五八ページ以降になると、本文自体は、もちろん松平文

庫本の方も、中村本の方も、まだまだ続いていくんですが、歌の詠まれる場面々々が、もう一致しなくなるんですね。ざっと見た限りですと、見落しもあるかもしれないんですが、ともあれこういう現象を、一体どのように位置づけるべきなのか、ということと、あともうひとつ、中村本は、どうして末尾欠巻部分に該当する本文を持つていないのか、ということ。このふたつを考え併せてみますと、まず大元には、歌の詠まれる場面が一致するあたりまでの『寢覚』があって、それを共通祖本にしつつ、そこから分岐して、別々に、松平本なり、中村本なりの本文が派生していった、生成されていったのではないか、という気がするんですが。

▼仁平…生成っていう言葉が出てきたんです。『平家』では生成するテキストとして、このテキストも『平家』だ、これもそうだったという論理で研究が随分進んでいます、それをほかのものに当てはめていいのかどうか。例えば中村本、改作本というのが本当に改作本なのかどうか。あれはインチキダイジュスト版というか、終わり方が、もし中村本のような終わり方を『寢覚』がしていたとしたら、これ、どうしようもない終わり方ですよね。

▼中川…「どうしようもない」というのは、どうということですか。

▼仁平…もうちょっと暗い、ぐずぐずした終わり方をしてくれないと、それまでの展開を読んでいた読者としては「これは何じゃ」と言いたくなるんです。文体も……。

▼横溝司舎…違っていると!?

▼仁平…違いますよね。明らかにね。これが『源氏』の梗概だったら本当にうまくつないでいるのがありますよね。僕が持っている古筆切でもありますが、そういうものとは全然違って下手な文章で。下手は評価が人によって異なるとは思いますが、あれは例えば今回問題になっている伝後光厳院筆の『寢覚』はそのクラスの改作本の切だなんていうことは、まずないでしょうね。ということ、改作本、例えば今回出てきたもの、『寢覚』の改作本だとか、あるいは同じ話型の物語の切だと考えようとする、これまでずっと話してきたような断簡のつながりっていうものの説明がなかなか難しくなると思うんですね。ただ、全部そうだとしたら、ツレだとは考えるべきではないとは思いますが。

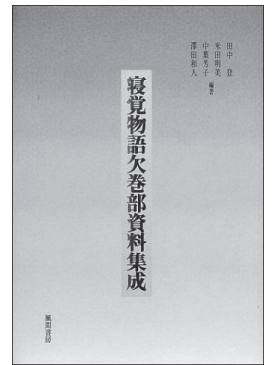
▼横溝司舎…『寢覚』の終末部は、意外と大団円だったという可能性もありますか。『無名草子』は「寢覚めせし昔のことも忘れられて今日の円居にゆく心かな」と詠んだのか、幸せそうな女君を「いと憎し」と散々言っているでしょう。

▼中川…私もそんな印象をうけます。『無

名草子』読んでみると、これどう考えたってハッピーエンドで終わっていたんじゃないかって。確かにこれまで復元案としては末尾欠巻部分の最後で寢覚君が死ぬことになっていたように思うんですけど。実はこの「寢覚君が最後に死ぬ」という説をずっと過去へたどっていくと、松尾聰氏の復元案に行き着きます^{*6}。松尾さんが「寢覚君が最後に死ぬ」と解釈しているその根拠として挙げているのは、『風葉集』六六三番歌「招けども」の詞書です。実は、この歌、明らかに中間欠巻部分のものなんです。だけれど、松尾さんは、この詞書に「入道太政大臣の女が死んだ」と書いてある。本当はこの場合の「入道太政大臣の女」というのは大君のことなのに寢覚君のことだって推定してしまっただけ。だからこそ寢覚君は最後に死んだという解釈になったのです。つまり「寢覚君が最後に死ぬ」というのは、結局、誤読から始まっているんですよ。本当は中間欠巻部分の歌として読まれるべきものを末尾欠巻部分のものとして読んでしまった。結局は、その誤読から「最後は不幸で終わる」というイメージが、一気に広まっちゃったわけで……。そんなイメージに、いつまでもとらわれる必要はないんじゃないかとも思ったりしますが、どんなものでしょう。

▼横井…この田中さんたちの『寢覚物語

* 6 松尾聰『平安時代物語の研究』（1955年、東寶書房）



『寝覚物語欠巻部資料集成』
(2002年、風間書房)

欠巻部資料集成^{*7}だと、梗概は死ぬところまで書いていないね。

▼仁平…書いていない。

▼横溝司会…今、そのあたりはちょっと不明っていうか、最近では書かないですか？

▼横井…死ぬところまで行っているっていう人は、あんまりいないんじゃないか。

▼大槻…少ないです。

▼仁平…ずーっとあのトーンで行って、最後に、めでたし、めでたしってのは、「えっ、それでいいの」って。

▼横溝司会…表面的には大団円でも、寢覚の上個人の問題としてはっていうのもあるんじゃないですか。予言の問題とも絡んで、深層の部分で。

▼仁平…あと、末尾欠巻部の部分が改作本になさ過ぎますよ。

▼横井…中村本が書かれた時には、もう既になかったんだと思う。



いる。その「白河院」が作られたのは頼通の時代だ。だから孝標女が書いたんだという論理は、ちょっとおかしいと思うんですね。

▼横井…論理が逆じゃないですか。

▼中川…うーん。例えば、引歌とかの場合

▼仁平…そう。僕もそう思います。

▼横井…ちょっと違う点でお話ししてよろしいですか。私は、この当時の物語を考えるにあたって、近代的な「文学作品」という意識をあまり持たない方がいいと思っているんです。エンターテインメントではあるが、読者っていうのは非常に限られていて、限定一部のもので、読者の顔を想定しながら書くのがこの時代の物語だったはずですよ。『源氏物語』といえどもそうだったし『寝覚』もそうだっただろう。ただ、『寝覚』の場合は『源氏物語』で紫式部あるいは紫式部の娘が成功したっていうのを見ている。『寝覚』の作者っていうのは、孝標女だと仮定してのことですが、その成功を見た上で自分もその作品を書いているんですね。永井和子さんの推定にそっくり乗っかるのも問題なのかもしれないんですが、現存の『寝覚』が元の四分の一ぐらいだということです。その仮定にそのままのままで四分之三だとすると、全体は『源氏物語』と同じぐらいの量になってしまおう。つまり、孝標女と想定される『寝覚』の作者は『源氏物語』と同じぐらいの作品を書いて「どうだ、私は『源氏物語』の作者と同じ、あるいはそれ以上の作品を書けるんだ」ということをある人に対して示したかった。それによって自分は紫式部と、あるいは紫

式部の娘と同じような処遇を受けたいという自己アピールだったんじゃないだろうか。そういう説が台頭しています。もしそう仮定することが許されるのであれば、『源氏物語』と同じぐらいの分量を書いても不思議ではない。『源氏物語』の成立論として正編・続編があったとしても、正編・続編がそろっている段階で『寝覚』の作者は『寝覚』を書きつつあるんだらうと。正編・続編が別な作者であったにせよ、正編・続編がそろった、この『源氏物語』の総体を見ながら『寝覚』を書いているんだらうというふうに僕は想像しているんですね。

▼中川…あの。ここで、こんなことを言う議論が無茶苦茶になってしまいうかもしれないんですけど……。

▼横井…はい、言っちゃいましょう、これは。

▼中川…先生、以前に、「白河院」に関するご論文^{*8}をお書きになっているでしょう？ あ論文が目的としているのは、やはり孝標女が『寝覚』を書いた、『寝覚』の作者は孝標女だということを導き出そうというか、それを実証しようとしているんですね。

▼横井…はい、そうです。

▼中川…私の中では、『寝覚』の中で「白河院」が非常に重要な場として描かれて

思うけど。

▼中川…いや、私はたぶん……。

▼横井…蓋然性の問題で、これも水掛け論かもしれないが……。

▼中川…そうですね。確かに先生の「白河院」の歴史的位置づけに関するご指摘は、なるほどと思うんです。でも先に言ったことについては、やはりそれ以降に作られたっていうことしか導き出せないんじゃないかな。まあ、いいんですけど。私はおそらく、こうした横やりを入れる役割として、ここに呼ばれていると思っているので、あえて言っているんですけどね。

▼横井…それ、削らないでください。

▼横溝(司会)…どこかでそういう同時代性みたいなものは見だせるところもあるかもしれないし、『いはいでしのぶ』だと白河が物語の舞台になっていて、あれはやっぱり『寝覚』とやや違うのかなというの、白河院が登場する、院その人がやっぱり院政時代の院そのものなんです。治天の君っていう感じで。物語を通して、ずっと皇位継承に深く絡んでいくし、そういう意味では帝が全然力のない帝として登場してくるっていうことで、やっぱり院政期以降の物語だなという感じがするんですね。それに比べると、やっぱり『寝覚』の院というのは、やっぱりそういうものともちょっと違う造形として出てき

*7 田中登・米田明美・中葉芳子・澤田和人編『寝覚物語欠巻部資料集成』(2002年、風間書房)

*8 横井孝「『寝覚』の風景——「しらかはの院」」(『平安後期物語の新研究』2009年、新典社。のちに『源氏物語の風景』2013年、武蔵野書院)

てはいるんですが、逆に「いはでしのぶ」の問題として考えると、あれ『寢覚』の影響も結構強いんですね。だから、白河院が出てきて、院政時代をまさに彷彿とさせるような人物がそれこそ白河院という名で登場するからといって、じゃあそこからどこまで同時代性という舞台設定そのものまで読み通せるかというのは、ちょっと難しいところがあるのは事実なんです。ただ同時代性を探れるところもあるんじゃないかなとは感じます。

▼横井・古筆切から離れて申し訳ないけど、彼の仕向けたことだから。久下裕利さんに注意されただけで、「おまえの論文は白河院か白河殿か、はつきりしない」ということを言われたんですね。『寢覚』のいろいろな復元案や欠巻部の断簡に出てくるような「白河院」とおぼしきものは、どうも私どもの見るかぎり、院政期の白河院では恐らくないだろうと。ただし、道長が生きているころの「白河殿」かどうかははつきりしない。非常に曖昧なんですよ。『白河院』と「白河殿」が混同されるような時代、やっぱり院政期に入る直前ごろの、いわゆる頼通の時代あたりに想定するのがいいのかなということであの論文を書いているんですが、実は明確にその弁別ができていないということを見抜いたのが久下さんでした。^{*9}

▼横溝司舎・「巢守」でも「白河院」とあって、そのことについては前に座談会で話題になっていました。^{*10}

逸文資料を どう読むか

▼横溝司舎…ここで話を伝後光厳院切に戻しますと、実はさつき久保木さんが、これつながるんじゃないかというところ、私が食らいついたというか、話題を持っていきましたのは、『集古帖』ですね、徳川が持っている。これは結構早くから紹介されていて、『寢覚』ではないかといわれていたものです。これについて仁平先生が、「女君」とあるのは寢覚の上で、院が寢覚上を見ているシーンではないかと。それに対して田中登先生が、そしてここにいらっしやる大概先生が、これを逐語的に見ていった場合に、やや状況が異なるのではないかということをおっしゃって、これはいわば『寢覚』というよりは、もっと『忍び音』とか、ほかの物語を想定したほうがふさわしくて、何もこれが仮死状態になった女君が白河院に運ばれてきて、そこで冷泉院が女君を見つめているというシーンというふうに捉えることもないんじゃないか、というようなことをおっしゃっているんですね。

これについて考えていたんですが、『寢覚』の可能性として見た場合、女君が寢覚の上で、その「女君のつきせぬけしきも、この人におもひしみたるにこそはあめれな」とある「この人」っていうのをいわれる内大臣というか、男君ですね、そう見て、この発話主体をやっぱり冷泉院と見ることでできるのではないかと考えたんです。実は、なぜそう発想するかといいますと、池田和臣先生の古筆切があります。これ、どうも『集古帖』に続くんですね。池田先生の切については池田先生ご自身が既に、これは寢覚上を秘密裏に聞いている、幽閉しているというんでしょうか、冷泉院がその事実を隠しながら、やってきた男君と対面している場面ではないかと言われている。冷泉院がそうした、何かこう、素晴らしい女性をどうも手元で隠している。その事実を知っている男君が「一体どんな人なんだ!？」と。あれほど寢覚上に執心した冷泉院であるからには、さぞ素晴らしい人であるのではないだろうかというので、お互い向かい合いながら探り合っているようなシーンということになるわけなんです。これ、『集古帖』から池田先生の切にかけて「おぼしめすにも御むねいたく心やましきをおぼしづめて」という形でつなげて読めるんじゃないか。男君と冷泉院が対座しているわけで、



伝後光厳院筆「末詳物語切」(池田和臣蔵)

ちょっと伺いたいと思いますが、いかがでしょうか。
▼仁平…やっぱり大概さんがなさったように逐語的に、きちんと文法的に矛盾のない自然な解釈をもう一回ちゃんと全部やり直すっていう作業は必要だろうと思うんですね。これはもう当然のことです。

また、それから横溝さんのおっしゃった、仮に『寢覚』の切だと仮定して解釈していった場合にどういう場面として読めるか。これはかなりの解釈のバリエーションがあって、実はなかなか難しいと思うんですけど、そういう作業、反復運動をやって自然なところに、明確ではないかもしれないが自然な解釈が出てくるのかという気がしているんですね。これまでの解釈を、もう一回改めて全部見直す必要があるだろうと思うんですね。ただ、この表現も例えば私が『寢覚』の切だと言った、私の持っている切は、豊島秀範^{*11}さんが「奉る」っていう表現が出てくるんで、これ帝が女君に対してそういう表現を使うのはおかしいということを言っていたんですが、ところが実は『寢覚』ではそういう用法が複数出てくるんですね。用例を、きちんと、こういう表現というのはあり得るんだらうかとか、人物関係というところ、こういう表現は自然なのかどうかっていうことを問い直しながら、でもやっぱり

『寢覚』の表現、あるいは近いところで『浜松中納言』だとかの表現だとか、広く見渡しながらかめてきくと、あまり先入観を持たないで——検討し直すことで見えてくるものがあると思うんですね。ただ、それでもやっぱり形式論理でいえばどういいう解釈を取っても疑いが残るといいう疑いをゼロにすることっていうのは論理的にたぶん不可能だと思うんですね。

▼横溝司舎…そうでしょうね。

▼仁平…ただ、今回横井さんが報告されたような、そういう切が出てくる可能性は、これまた池田さんとも話したってさっき言いましたが、出てくる可能性はあるんだらうと思うんですね。

もう一枚出てきたときに、さあ、確かに末尾欠巻部の歌としてほかの資料に出てくるものと一致するものが出てきたから、これは『寢覚』でも、この二枚だけにしておこうということでも済むのかどうか。そういう不自然な偏りは、くだいようですが、私の持っている切は、もう自分では確信があるから四回も論文で主張したわけですが、くだいようですが、その資料と従来の推定、推測っていうのを突き合わせて、従来の推測というものを再検討する必要があるかどうか。それぞれ、あまり今までの自分の主張にこだわらずに考えてみる必要があるんだらうと思う

* 11 豊島秀範「『夜の寢覚』末尾欠巻部分の検証——寢覚の上の偽死とまさご君の勘当事件——」(『國學院雑誌』2005年10月)

* 9 久下裕利「挑発する『寢覚』『巢守』の古筆資料——絡み合う物語」(新刊『王朝文学の古筆切を考える——残欠の映発』に収録)

* 10 「座談会 王朝物語の古筆切」(『武蔵野文学』2010年増刊夏号、のちに新刊『王朝文学の古筆切を考える——残欠の映発』に再録、2014年、武蔵野書院)

んですよ。

例えば私の考えたことってというのは、寢覚上が仮死状態で白河院に連れていかれて、冷泉院がいるところで息を吹き返す。その後、そこを脱出したと考えているんですが、田中さんは、いや、後のほうで死んだような状態になっていたから、だから後で帝があれだけ驚いているんだと。それを批判するような形で池田さんが「007は二度死ぬ」――「寢覚上は二度死に返る」と言われた。『夜の寢覚』末尾欠巻部と伝後光厳院筆不明物語切の新出断簡、寢覚上は二度死に返る」という『文学』^{*12}に載せた論文の中では、二度死に返らせるわけです。そういう解釈もまた出てきますが、私は別の考え方をされていて、『拾遺百番歌合』の「しらかはの院より、あながちにのがれいで」という、この表現はやっぱり「死んだ」っていう表現ではなくて、これは、ただ脱出したと考えるべきじゃないかと。▼横溝司会…そこで秘法だとか、仮死状態というのは、もうあり得ない…。

▼仁平…それはもう、死んではいけないとクーパー券は一回使ったらもう終わり。そういう方法は一回使ったら終わりに。そうしないと、興ざめですよ。

▼横溝司会…いわば「そら死に」というのは、寢覚の上が死んだということがまづ世間にそういう状態として、それは実

際にはそうではなかったんですが、そういうものとして、まずは世間的には信じられていた状態を指して言っていることになるわけですね。

▼仁平…ただ、私の主張は主張として、それはそれとして、今いろんな推定が出ていますが、それはこれから出てくるかもしれない伝後光厳院筆の断簡も含めて、その内容をきちんと読んで、それと矛盾しない形で考えていくことによって、従来の推定というのは実は根拠がなかったんだとか、実は無理な解釈だったんだとかっていう反省が出てくるんじゃないかと思うんですね。それによって『寢覚』の研究が進んでいくのではないかと期待しています。

▼横井…それを言うのであれば、私はすごく大ざっぱな言い方なんですけど、『寢覚』であろうが、『寢覚』でなかろうが、とにかく資料を開示すること。これみんなに公開をして、みんなで考えていただくと、非常に無責任な言い方なんですけど、そういう……。例えば今、われわれこうやって閉ざされた所で閉ざされた資料で論じているわけですが、ほかの外部の方たちはそれを見ることができませんので、この議論に参加できない。そうすると、われわれだけの盛り上がりでしかないんですよ。そうでなく、もう少しいろいろ議論する

ためには、やっぱり資料というものがみんなに公開されている必要があるんじゃないかと思うんですね。物語の古筆切の難しさというのは、やはり今もここで既にいろんな擦れ違いが生じて、盛り上がっているような、盛り上がっていないような、こういう議論というのはやっぱり結局、物語の難しさだと思うんですね。和歌だということではないと思うんですが、どうですか、久保木さん。

▼久保木…和歌だけのことがどうかはわかりませんが、確かに和歌では、古筆切を含めて、とにかく資料を開示しているという、共有しているという意識とか動きとかは、ずっと根強くありますね。物語の、特に古筆切に関しても、本当におっしゃるとおり、一般的には知られにくい資料こそ、積極的に紹介していく必要があるんだらうなと思います。私が以前、とりあえず翻刻だけでもと、断簡二葉を紹介したのも、そうした思いからでした。ただ、これまでの先生方のお話をうかがっていて確かに、紹介するばかりではなく、それら一葉ずつを、丁寧に読んでいくことが必要なんだなと、当たり前のことなんですけど、痛感しました。

その際ですが、あくまで断簡に記されている本文だけに基いて解釈していくのか、それとも、ほかの古筆資料や、逸文

資料なんかをも参照したり、援用したりしながら読み解いていくのか、と考えるみますと、実際にはやっぱり、かなりの部分で、後者のように、参照・援用せざるを得ないと思うんです。が、そうする時の、方法論といったものが、いまだきちんと確立されていないというか、これまであまり自覚されたり、意識的に検証されたりしてこなかったんじゃないかな、という印象をかなり前から抱いています。

先程の、中村本の歌の話に戻ってしまっていますが、『無名草子』が引く歌にしても、『風葉集』が引く歌にしても、中村本の方の歌とは一致しないんですね。一致するのは松平文庫本の方なんです。ですから、ほぼ鎌倉時代あたりにおいても、基本的には、松平文庫本の本文の方が主流だった、ということになるんだろうとは思いますが、ところが、これは中村本などを底本にした『中世王朝物語全集』（二〇〇九年五月、笠間書院）の解題で、サラッと触れられているだけなんですけど、『拾遺百番歌合』に関しては、十番右の「限りとして命を捨てし山里の夜半の別れに似たる空かな」という一首が、これは中村本の方とほぼ一致しているんです。松平文庫本では中間欠巻部分に該当している場面ですが、中村本にも「限りとして命をかけし山里の夜半の別れに似たる空かな」（『全集』三〇六

ページ）という一首があるんですね。またもう一首、やはり中間欠巻部分になりますが、『拾遺百番歌合』十二番右の「絶えぬべき契りにそへて惜しからぬ命を今日に限りてしかな」というのも、中村本の「絶えぬべき契りにかへて惜しからぬ命を今日に限らましかば」（『全集』二四三ページ）という一首にはほぼ一致しています。ということは、他の逸文資料はともかくとして、少なくとも『拾遺百番歌合』が拠った『寢覚』の本文の一部分には、中村本の必要素が含まれていた、ということになるのではないのでしょうか。

であるのでしたら、複数の断片資料、逸文資料を無条件で一緒くたにして、一種類だけの本文を復元していこうというのは、やっぱりちょっと、危険じゃないかと思うんです。そうではなく、『風葉集』だったから『風葉集』だけから、まずどれぐらいの内容が導き出せるか、また『拾遺百番歌合』だったら『拾遺百番歌合』だけから、どれぐらいの復元ができるかということとを、別々に検討してみても、その上で、伝後光厳院筆断簡なり、伝慈円筆断簡なりの本文と、どの程度の距離がありそうなのか、なさそうなのか、ということを判断していくのが、手続きとしては適切なものではないかと思う。まあ、とは言っても、何より資料的な制約が強いですから、現実

的にはかなり難しい、理想論に過ぎないのかもしれないんですが、でもそこまではできないにしても、やっぱり、そうした危険性があること自体は、自覚しておいた方がよいのでは、とは思っています。

あと、さらにその前段階なのですが、とあるまとまった逸文資料があった場合、それに基いて、一体どれだけ確実に、散逸作品の復元ができるのか、ということ自体の検証が、これまであまり、なされてこなかったんじゃないか、という気もしています。見落としがあつたら申し訳ないのですが、特に散逸物語の場合、逸文を寄せ集めて組み合わせ、物語内容を復元してみたとしても、それがどれほどの確かな復元なのかは、実際には確認のしようがない、証明のしようがないんですよ。証明するには結局、その物語と比較してみるしかないわけですが、物語自体が散逸しているわけですから。

ただ、間接的にでしたら、そのような、逸文に基づいて散逸物語を復元しようとする方法が、どれだけ有効かということと、ある程度は検証できるんじゃないかと、前からちょっと考えていました。要するに、散逸物語ではなく、まず現存する物語で、同じことをやってみればいいと思うんです。例えば『源氏物語』について、ひとまず現存伝本がすべて散逸し

* 12 池田和臣「『夜の寢覚』末尾欠巻部と伝後光厳天皇筆不明物語切の新出断簡——寢覚上は二度死に返る」（『文学』2012年3月）



ていることにして、『風葉和歌集』なり『物語二百番歌合』なり『無名草子』なりから、『源氏』の「逸文」をすべて集めて、それぞれにどのくらいの復元ができるのか、試みてみる。その上で、現存している『源氏』と突き合わせて、どのくらいの距離がある

のか、かなりの確に物語内容の復元ができているのか、それとも全然違う展開になってしまうのかを調べてみる。『源氏』じゃ長過ぎて大変でしたら、『狭衣物語』だって構いません。むしろ『狭衣』の方がより顕著で面白いかもしれないですね。あるいは、今回の『寝覚』だって、部分的には可能はずです。現存部分でそれをやってみて、この逸文資料に関しては、ここまでは言えそうとか、そこまで言ったら、それはちょっと行き過ぎかもっていう、言わば距離感を測りながら、それぞれに活用していくのがいいんじゃないかなと思っただけですが、いかがでしょうか？

▼横溝司会…その例として『有明の別れ』が……。

▼大槻…ありましたね。

▼横溝司会…ええ。天理大学蔵の孤本ですが、あれが発見される前に松尾聰¹³氏が『風葉和歌集』とかで考えられるだけ考えて、それで後から写本が出てきたという。

▼大槻…だいぶ違っていた。

▼横溝司会…だいぶ違っていたんですね。限られた資料での復元がいかに難しいかということですね。

▼大槻…特にあれは男装してましたからね、女主人公が。しかも中宮でありながら男装していた……。

▼横溝司会…ひそかに男装して行動して

いたと復元されたんですね。中宮になったのは男装を解除して後のことでしたが。ですから、『有明の別れ』の例でいえば、あれは本としてまとまって出てきたからいいようなものの、もしあれが断片としてあった場合、実際以上に、物語内容を誇張してしまう可能性だってあるわけですね。松尾氏は復元の困難さの事例とするためにあえて著書に収められたわけでした。だから、同じような危険性というのは、『寝覚』でもあって、シビアに言えば、やっぱり今、確認されたのは横井先生が紹介なさった一葉だけに過ぎないということもいえるわけですね……。

▼横井…ただ、私の文章の最後のところで逸文資料にちょっと疑いを抱いている部分があったんですが、踏み切れなかったところがありますね。やっぱり逸文資料は、一応絶対のものだっていう固定観念があったものですから。なにせ『拾遺百番』は定家ですからね。これはやっぱり慎重にかからないといけないですね。やっぱり定家なりの「改作」があると考えないと、『拾遺百番』を使うのは、今後はもっと慎重にならないといけない。

▼横溝(司会)…見極めた上で、やっぱり活用できるのは……。

▼横井…そうですね。『風葉和歌集』の詞書もやっぱり精査するべきでしょうね。あ

るもので精査できるんじゃないか。

▼大槻…『源氏』とか『狭衣』ですね。

▼横井…そうですね。

▼中川…また、そうした資料自体にも文法的に不自然な敬語が使われていたりするものとかあったりもして、どう解釈すればいいんだろうって悩んでしまうものもありますからね。これまで私たちは、散逸物語を復元する時には、それぞれの資料の文章を辿りながら、「ここには最高敬語があるから身分が高い人だ」とか、「謙譲語があるからどうだ」とか敬語に着目しながら人物関係を推定したりしてきました。でも、その推定の根拠となるもの自体に文法的不自然なところがあるとなると、もうどこまで信用すればいいかわからなくなってしまう。逆に、先ほどの「奉る」についても、一見こうした用法はおかしいように感じられる場合でも、『寝覚』にはあったりもする。そういうこともあるわけです。だから、私たちの常識では考えられない用法が入っていたりすると、そこからまた変な説が作り出されて、ますますよくわからない場面になっていったりもする。

▼横井…『風葉集』もそろっているものではない、古写本はないでしょう。古筆切は……。

▼仁平…『寝覚』の断簡と判断できるもの

と『拾遺百番歌合』が違っていたという例が出てくると面白いんですけどね。

▼横溝司会…いろんな資料を取り合わせて読んでいるということ、さまざまな矛盾や不都合が生じるという可能性は十分あり得ると。

▼横井…しかも、その散逸資料にはバイアスが掛かっている。

▼横溝司会…ええ、掛かっているという可能性がありそうですね。異同も、外部資料といいますが、欠巻部の資料でも重なっている部分で異同があったりとか、引歌的な表現とか異同があったりとか、一筋縄ではいかない部分も実際、認められるわけですね。

これまで後光厳院切のことについていろいろ話を展開してきたわけですが、できれば欠巻部の、それこそ寝覚の上の擬死事件ですとか、まさこの勘当事件とか、それから終末部の問題、一体どういうふうにかこの物語は終わっていたのか。予言は果たしてどういう形で、冒頭部分と照応する形で閉じられることになっていたのか。本に物語の終わりの部分にだけに、本当に問題は挙げようと思えば挙げ切れないうほどう出るわけですが、それはかなりいろいろな『寝覚』観というのでしょうか、読み手の感触や願望がさまざま出てきて、それこそ水掛け論になってしまう。

また、これまでなかなか話題にされることもなかったと思うんですけど、今回資料の問題を特集したということでは、やっぱり『寝覚』の残存状況というか、残り方ですね。中間がなくて、結末がなくて、中途半端な状態で残っているという。一方には、絵巻の部分は末尾の部分が詞書として残っていて、あれも本本当にどれだけ前の部分からずっと絵巻になっていたか……というのは分らないですね。

一方では先ほど久保木さんも話題にされていたような、改作本は中間欠巻部を明らかに備えた本に基づいていると思われるわけですが、末尾のほうについて果たしてどうだったのかなど。一体何に基づいて改作しているのかなど。こんなに、松平本とか五巻本とか、前田家本だと三巻に分けられています。そういう本と、あるいは今回、後光厳院切で残っているような、そうした末尾しかないもの、あるいは中間だけしかないもの、どこかで一つの本が分かれていってしまった、それぞれで写されたり、あるいはそれが現存本でもいろんな不都合があるところに手が加えられたりしていつて残っているのか。こういう問題っていうのは、やっぱりどこかで一つの本から分かれていったと考えるほうが自然なのか、どうなのか。

▼久保木…あるいは中村本に関しても、例

* 13 前出 P.23 * 6の松尾著書を参照

えば中間部分までの残欠本があつて、それにまた後世手が増えられて、続きの話があらためて付け足されたり、中世的な性格が反映されたりする結果となつた、みたいな想定もできるかもしれないですね。

▼大槻…ただ、それを考えると、原作の場合は、帝がだいたい最初の方からちょこちょこ出てきまして、そして途中からは、かなり強力に出てくるわけですが、それに対して改作本の場合、その帝の部分だけ外してあるわけですね。例えば冒頭のところ、原作では「国王まで奉り給ふばかり」つていう予言があつて、その予言が実現するのかがどうかつていうのが、研究者の間で問題になってるところですが、改作本ではその予言がそもそもないわけですね。その後、国王、すなわち帝が出てきて、原作とは違つてちょろつと出ただけで終つてしまふ。そうすると、改作本は最初から帝の部分を外そうという意図で作つたんじゃないかというふうに理解できないかなと思うんですね。

▼中川…むしろ逆に、そうした帝の部分は、現存本の方が付け足したものだとは考えられないんですね。

▼大槻…でも、その冒頭のところからの流れがありますから。

▼中川…いや、実はずっと前に論文^{*14}に書いたことがあるんですけど、松平本などの

▼横溝司会…だから、あれなんか見てみても、やっぱり後光厳院かどうかはともかくとして、あの抜書をしている人というのは、手元にあつたのはやっぱり中間と欠巻部分しかない残欠本だったんじゃないかと思うんですね。本当に、もしかするのですが、その部分の『寢覚』は知つていますが、今われわれが読んでいる『寢覚』は知らなかったという可能性もあるんじゃないかと思いますが。それこそ、この物語がどれだけ流布して読まれていたかという問題になります。

▼久保木…私もそう考えてもみたんですが、でもやっぱり、欠けた物語、欠けた部分だけを対象として、わざわざ抜書にするのかどうか、あり得ないとはまでは言わないですが、結構な違和感も残るんですね。

▼横溝司会…現在、私たちは、いつてみれば欠けたものを読んで、それについていろいろ論文を書いているわけですよ。それで『寢覚』を知つたような気持ちになつてはいるわけですね。それと同じように、これは『いはでしのぶ』を調べていて思つて、いることなんですけど、古い物語の古写本であるということ、たとえば残欠本でも、残欠本であるというのを承知の上で結構大切にされたり、その部分が詳しく読みこまれたり、あるいはそれに手が加えられて、その部分だけで改作が行われた

現存『寢覚』にはどうやら二つの層があるようなんです。例えば、真砂君が誰に似ているかという問題について。中村本では真砂君は父親だけに似ている人物として描かれているのですが、なぜか現存本では父親だけに似ているとする場面と、父親にも母親にも似ているとする場面の二種類があるんですね。しかも父親にも母親にも似ている場面というのは、いずれも帝が関わっている場面なのですが、それらはそっくりそのまま中村本にはない。このことと連動して末尾欠巻部分の資料である『寢覚物語絵巻』の詞書を読んでみると、そこでも真砂君は父親にも母親にも似ている人物として描かれていることがわかります。だからなんだって言われればそうなんですけど、なんとなく現存本には追加されている部分があるんじゃないかという感じがするんですね。もつと言うと、例えば巻三の冒頭で男君は宮中では、梅壺¹にいるつて書かれています。が、しばらく話が進んでいくと「右の大殿」の娘で、梅壺²の女御というのが突然登場する。つまり、梅壺³という同じ場所に二人がいることになつてしまふのです。これは、明らかにおかしい。しかもその「梅壺」の女御という女性性は、その娘たちの女一宮と女二宮も含めてなのですが、中村本には登場せず、かつ末尾欠巻部分になつ

てはじめて重要な役割を担う人物であつた。こうなると、やはり現存本の方が追加しているのではないかな、というのが私の考え方です。

▼横井…なるほど。面白い。

▼久保木…ざつと突き合せていつて、中村本の方が、場面々々の本文量は、少ない場合が多い感触を持ちましたが、それが省略なのか、それとも松平文庫本の増補なのかがつていうのは、なかなか一概には言えないですけど、どうなんでしょう？中村本の方で、ある種梗概化されたようなところもあるんじゃないかな？

▼横溝司会…そうしないと短くならないですよ。梗概化ということでは『寢覚抜書』ですが、あれは中間と欠巻から抜き出していますよね。

▼久保木…あの『抜書』も、やっぱり考えれば考えるほど不思議なんですよ。最初にも言いましたが、なぜ本当に、中間欠巻部分に末尾欠巻部分という、現在の我々からすれば、ですが、何とも出来過ぎとしか言いようがない残り方をしているのか。ちよつと理屈がわからないです。

▼横井…でき過ぎで。

▼横溝司会…あれ自体がもうちよつと長さのあるもので、ほかの部分を含んでいたのか。

▼中川…でも、あれは分からない。

ていたんですね。

▼大槻…それにしても中間と末尾が、同じ巻に入つているのは……。

▼横井…つながつて……。

▼大槻…そうですね。何かで後からつけたのかもしませんが。

▼久保木…あ、ついでに『抜書』について、もうひとつよろしいですか？これも、ただの思いつきなんです。

この『抜書』の冒頭の第一場面は、「春や昔の、とのみ、この頃の夜とても寢覚め

□□に」のように、「春や昔の春ならぬ」の引き歌が始まつて、少しの地の文に続いて「咲きにほふ」「あはれなど」という歌二首が記されています。これ、中間欠巻部分に該当するとされていますが、その中の、どのあたりの部分だったかというの、まだはっきり指摘されてはいないようですね。が、今回、中村本をバラバラと見ていきましたら、『中世王朝物語全集』の一〇五ページ、【一二】とされている段落の始めに、「姫君は、「春や昔の」とうながめ給へ」という、同じ引き歌をしている本文があつたんですね。^{*15}『抜書』に見える歌二首は、そのあとに続いてはいないんですが、中村本では、松平文庫本に載っている歌も載せていない場合がありますので、ここもそうした事例なのかと、中村本のその続きを読み進めてみますと、

* 15 なおこの点に関しては、すでに米田明美氏による指摘があつたことを、座談会終了後に気がついた。同氏「夜寢覚抜書」の新出和歌の周辺——中間欠巻部の広沢での蓬瀬と別れ——（藤岡忠美先生喜寿記念論文集刊行会編『古代中世和歌文学の研究』所収、2003年、和泉書院）参照のこと。見落としをお詫びしたい。

* 14 前出 P18 * 5 の論文

「昼は、女房など集まりて絵描き、物語りなどするに慰みて暮らし給ふに、程なき春の夜なれどもどろまれ給はねば」とあります。一方、『抜書』で、先の歌二首に続く第二場面には、「昼は小倉の山を眺め暮らし、夜は寝覚めてかかる嵐を聞き渡すらむほどよ」とありまして、表現自体は例によって全然違うんですが、昼はこうして、夜はこうして、という叙述のあり方は、類似しているように思えます。

そうしますと、中村本の【一二】と、『抜書』の第一・第二場面とは、あるいは同じ場面なのではなからうかと。と同時に、『抜書』の第一・第二場面は、これまで別々の場面と見なされていたようですが、実はそうではなくて、内容的に連続するものだったのではなからうかと。

またさらに言えば、ここであらためて松平文庫本と比較してみますと、中村本の、この【一〇】から【一一】段落目あたりが、松平文庫本では、ちょうど巻二の終わりにあたりに該当しているんですね。そうした点、要するに抜書の「春や昔の」で始まる第一・第二場面というのは、中間欠巻部分の中でも、巻三のまさに冒頭部分に該当する本文だった可能性が出てくるのではなからうかと、考えてみたりしているんですが、いかがでしょう？

▼仁平・現存巻二の後に続く部分という

が山積みであるということが、今回『寝覚』の一部である伝後光厳院切の発見によって、それがいよいよ現実のものとして明らかになってきたという気がしております。皆さまにいろいろなご意見を出していただいて、勉強になりましたことを感謝申し上げたいと思いますが、終わりにあたって、今回の座談会の内容を踏まえまして、これからの『寝覚』研究というのはどういうふうに行われていったらいいのだろうかとということ、皆さまの方法論とか、持論みたいなもの、あるいは『寝覚』研究への夢、そういうものについて、最後にお聞かせいただければと思います。

『夜の寝覚』研究の 課題と展望

▼横井・先ほど来、お話が出ていますように、残された資料というのは、点と線というよりも点しか残っていないので、われわれはどうしても点と点を直線で結びたがってしまうんですね。実際にはもっと紆余曲折してその点と点がつながるという可能性も考えなければいけない。そうすると、残された点と点をつないでいく事自体はいんだけれども、もつといういろいろな可能性を考えていかないといけないのではなからうか、というふうに強く思っ

ことです。

▼久保木・そうです。巻二が完全に終わっているのかどうかはわからないですが、そのあとの、今日失われている巻三の冒頭部分が、この『抜書』の「春や昔の」だったんじゃないかということ。ちなみに、松平文庫本の現在の巻三なんかを見てみしても、冒頭が「なになり袖の水とけず」と、嘆き明かしたまひてし朝より」と、引歌風に始まりますので、そうしたあたりとも整合すると言え、するのかなあ、と。全然見当違いなことを言っているのかもしれないが……。

▼中川・分らない。そうかもしれないし、そうじゃないのかもしれない。

▼横井・現存本も随分、途中、何箇所か本文に損傷がありますよね。

▼横溝司会・だいぶ欠落していますね。

▼横井・特におしまいのほうにあるんじゃないですか、巻の。

▼仁平・今、残っているのも時代が下った本文ですものね。随分、下っていますからね。

▼横井・私はこの現存の巻二は「いとしづやかに」、「これは『源氏』をまねした巻の閉じ方じゃないかなというふうに思っています。これはこれで巻の閉じ方としていいんじゃないかと。私は、この形式ついでいうのを非常に気にするので、やつぱ

ています。『寝覚』という作品自体も平安時代の一つの作品ですので、これも点と点の話じゃないですが、平安時代の物語の様式、形式というのは勉強した上で『寝覚』を見た場合に『寝覚』はそれに対応できるのかどうか。これも『寝覚』内部の問題と同じように点と点を結び付けて考えていく必要があるんじゃないかなと考えています。

▼横溝司会・ありがとうございます。仁平先生、いかがでしょうか。

▼仁平・最初にも申しましたように、阪倉篤義さんの解説を最初に引きましたが、ああいう推定が果たして『寝覚物語』の叙述の仕方、展開の仕方と合うものなのかどうか、その全体のトーンと合うものなのかという反省が必ずしもなされないまま、例えば小学館の『日本古典文学全集』の解説だとか、そのほかの論文に今まで見られたのが、私としては非常に気になってきたことです。そういう推定をしようとして、『夜の寝覚』という平安後期の物語を文学史に定位するときに誤った定位の仕方をするにつながらんじやないかと。先祖返りをした、『無名草子』にもっと手ひどい批判を受けなければいけなかったような物語として見る推定っていうものを、もう一回反省して。一枚一枚の古筆切が『寝覚』かどうかということについては、

り冒頭の形式に対する末尾の形式。『寝覚』の最後は「とぞ」で終わってほしい。散逸した、一番最後の。あるいは「とぞ本に」とか、そう終わっていてほしい。それから、やつぱり巻の閉じ方というのも形式があつたんじゃないかなと思うんですよね。そうすると、現存の『寝覚』ついでいうのは、ちょっと何となく物足りない。形式を踏まえるということでは。

▼中川・でも、これは五巻本だけじゃなくて、三巻本という形もあるので、一概にこの形がもともとの巻末だとは限らないですよ。

▼横井・この巻二のおしまいは三巻本も同じ？

▼仁平・一緒です。

▼横井・だから、巻の閉じ方としては、まあいいかなと思っているんです。

▼中川・おしゃれな感じという意味で、ですか。

▼仁平・おしゃれというよりか、もう『大和』以来の末尾切断形式ですからね。それはもう『源氏』でも多用するし、ごくありきたりの方法ですよ。

▼横溝司会・だいぶ議論が煮詰まってきたところで非常に残念ではあるのですが、今回、伝後光厳院切を皮切りに、特に末尾欠巻部分に話が集中したわけですが、その資料の扱い方をめぐって実はまだ問題

それぞれ判断は異なると思いますが、出てきた資料で、これは『寝覚』である可能性が非常に大きい、私は自分の持っている切については、そう思っていますが、そういう切を頭に置いて、検討しながら、今までの推定というものを反省していく作業が、今、必要になっているんじゃないか、そんなふうに思っております。

▼横溝司会・ありがとうございます。大



概先生いかがですか。

▼大槻…『寢覚』に関する従来の研究では、「女主人公の思いの深化」であるとか、或いは「途中からの主題の変更」であるとかいうように読んでこられているんですけど、ではその『夜の寢覚』がそういう作品だとして文学史の中に据えたときに、前の作品から見ても、後の作品から見ても、そんな特異なものが本当にこの時期に作られたのかどうかついていうことをもう一遍考えなければいけないと思うんです。そもそも「思いの深化」というふうに解釈されたのはなぜかというのをずっと突き詰めていくと、実は末尾の部分の復元から来ているんですね。ちよつと長くなりますのでやめておきますが、明らかに末尾の復元から来ている部分が大きいと思います。ですから、もう一度客観的に考えて、「思いの深化」が描かれているということなことを言っているのかどうかということとを、もう一度、末尾も含めて検証していただきたいと思います。と言いますのも、「思いの深化だ」と読んだことによつて、この作品の中に矛盾やミスがあるという読みも生まれてしまっているんですね。例えば、巻三・四で寢覚上の思いがすごく深化したのに、巻の五では急に浅くなっているのは、これは作品のミスだ、或いは女主人公の描き方に問題がある、みた

いな読み方をされているんですけど、それは作品の側の問題ではなくて、その「思いの深化」という読みの方が間違っているんじゃないかということをもう一度検討してみてもいいと思うんです。作品の側の矛盾とか失考という考え方を持ってくる前に、まずもう一遍、作品の読み方を見直すということですね。それが必要じゃないかと私は思っております。

▼横溝司会…ありがとうございます。それでは中川さんいかがですか。

▼中川…復元の研究というのは、ものすごく楽しいものなんですけど、そもそもこの研究のゴール地点はどこにあるのかつていうことを、よく考えた方がいいかなと思います。「自分がよいと考えるもの」が、本当にゴールだと言えるのか。必ずしもそうではないだろうと思うんですね。復元の答えは、これまでの、そしてこれから出現するであろう資料の中にしか存在しない。「自分の思っている内容と違う」とか、「これはよい」とか、「これはおしゃれじゃない」とか、そういった主観的な基準をなるべく持ち込まないようにするべきではないかと思えます。資料をしつかり読み込むということはすごく大切で、それはいうまでもないことなんですが、復元のゴールは、読み手の心の中なんかには存在しないということを、どれだけきちん

と意識していけるのか。これが今後の『寢覚』研究にとっては重要ではないかなと、改めて感じました。

▼横溝司会…ありがとうございます。最後に久保木さんからもぜひ一言お願いします。

▼久保木…私は『寢覚』の専門家でも何でもありませんので、このような会に紛れ込んでしまっていて、ひたすら恐縮しているんですが、ただこれまで、和歌を中心に古筆切の発掘調査を続けてきまして、やっぱり資料を集めていくと、物語関係、仮名散文関係のものも、自ずと増えていくんですね。で、何か有効な使い方がないだろうか、ということも、ボンヤリと考えたりはしてまして、『栄花物語』なんかで、補助的に使ってみたりはしていましたが、今回の発見で、散逸歌集の場合と同じように、散逸物語の復元についても、条件さえ整えば、ものすごい威力を発揮するんだということを、あらためて痛感しました。伝後光厳院筆断簡については、まずは横井先生が紹介された一葉を主軸にして、その他十三葉のどれだけをツレと認定できるかどうかという点を含めて、これからさまざまな立場や視点から、議論をさらに活性化させていくべきだろうと思います。今、中川さんは、ゴール地点とおっしゃいましたが、私はスタート地点

の方で、これまで以上に、もっと資料を発掘し、紹介していかなければならないな、ということ強く思いました。

実は、ちょうど昨年度取得した科研費で、未詳物語切集成の試作を、計画の中に含めておいたんですね。公開できる形にまで持つて行けるかどうかは、今後の作業次第なんですけれど、これまでに集めてきた古筆切の中から、すぐには作品名を突き止められないような、珍しい本文を持った仮名散文切の翻刻を一括掲載して、PDFファイルで無料頒布して、皆さんにご活用いただけるような環境を整備できれば、と思っております。

▼横溝司会…どうもありがとうございます。私も今回、横井先生の発見には大変胸躍るものがあつたわけですが、これで一連の切は『寢覚』として読めてくる部分もかなり出てくるんじゃないかみたいな、非常に楽観的に考えていた部分もないわけではございませんでした。ただ、その段階にはさまざまに慎重な手続が必要だということも教えていただいたような気がいたします。そして、何よりも現存物語、残つてはいますが、当時さまざまに作られていた物語のほんの一部分しか今、伝わっていないという事実ですね。孝標女作の作品でも『みづからくゆる』、『朝倉』などに似たような表現が取られているという可能性も指

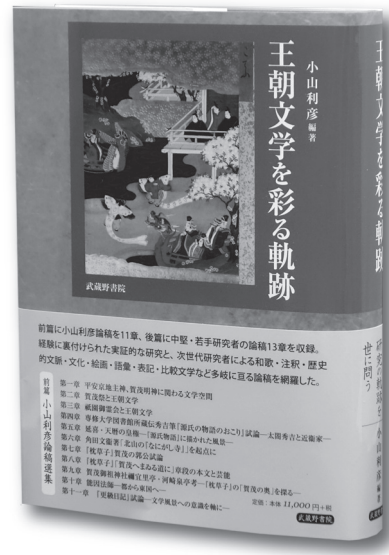
摘されているわけで、『寢覚』が出てくるということ自体も大歓迎ですが、あるいはほかの孝標女関連の物語の古筆切などの出現の可能性というのも十分視野に入れていきたいと思えますし、やはりいろんな意味で網を掛けておく必要があるかと思うんですね。現存している物語、中世王朝物語を含めても一帖抜けていたり、欠けていたりとか、歌が欠落しているだとか、そうした部分もあつたりしますし、どの部分に資料の出現の可能性が残されているかということについて、きちんと情報を整理しておかないといけない。久保木さんが試みられているような、とにかく広く物語切と思われるものを集めて、そしてそれを分析すると同時にどう共有していくかという課題が残っている。その中で残されている資料は限られているわけですが、それでもそこから何かこう、物語を読み復元する楽しさですとか、そういう夢をつないでいきたいというような思いも一方には強くありますので、そういう作業というか、営みというものを今後も皆さんと共に続けていけたらというふうに思っております。

拙い司会で本当に長時間いろいろご面倒をお掛けしましたが、中身の濃いお話しが伺えて幸いでした。皆さま本当にどうもありがとうございます。



小山利彦 編著

王朝文学を彩る軌跡



刊行の趣旨

王朝の文化空間について、平安京や大内裏の発掘による新資料、藤原良相邸の発掘に際しての墨書土器に関する資料、雲林院発掘における離宮の風景などの画期的な成果が王朝文学研究に多大の貢献を果たしている。また、有力文庫に所蔵される古写本の詳細な研究も試みられている。さらに、比較文化研究として王朝文化に関する研究が深められている。海外に所蔵される絵画を含めた古写本に関する研究も目立っている。

今日諸外国においても、それらを踏まえたシンポジウム・展示会が開催されている現状にある。

編著者の小山利彦は、そうした文献・考古学・歴史資料・祭祀芸能に関心を持って、王朝文学研究を重ねている。その間で執筆された論稿をまとめるという試みを持っていた。加えて、今回は周囲の若手研究者から論集を制作するという計画が立ち上がった。そこで、双方の目的を叶えるために小山は論稿選集とし、若手研究者はそれぞれの視点からの論稿を加えて一冊の論集にまとめる、という企画に結実することができた。学会において特に熱意ある研究活動をした上に、学会運営の裏方として役割を果たす労を取ってきた彼ら若手研究者の姿勢は賞賛に値する。そうした若手研究者がそれぞれのテーマを結集して、本書は前掲のような王朝文学研究の軌跡を世に問う、という試みを示すものである。

巻頭のことば——小山 利彦

前篇 小山利彦論稿選集

- 第一章 平安京地主神、賀茂明神に関わる文学空間
- 第二章 賀茂祭と王朝文学
- 第三章 祇園御霊会と王朝文学
- 第四章 専修大学図書館所蔵伝承吉筆『源氏の物語のおこり』試論——太閤秀吉と近衛家——
- 第五章 延喜天曆の皇權——『源氏物語』に描かれた風景——
- 第六章 角田文衛著「北山の『なにがし寺』」を起点に
- 第七章 『枕草子』賀茂の郭公試論
- 第八章 『枕草子』「賀茂へまゐる道に」章段の本文と芸能
- 第九章 賀茂御祖神社禰宜里亭・河崎泉亭考——『枕草子』の「賀茂の奥」を探る——
- 第十章 能因法師——都から東国へ——
- 第十一章 『更級日記』試論——文学風景への意識を軸に——

本体
11,000円(税別)
A5判上製 408頁
ISBN
978-4-8386-0270-4
武蔵野書院

後篇 王朝文学の新たな軌跡

平安朝和歌の生成と染色・染料

——『うつほ物語』の「紫」をめぐる贈答歌を中心として——

『落窪物語』における手紙と和歌との考察

注釈史のなかの『河海抄』——『首書源氏物語』をめぐる——

高麗人の親相についてのノート

——『花鳥余情』『細流抄』を軸にして——

藤壺の造型——尊子内親王の系譜との関わり——

「夕霧」巻の絵画化——小野の里と鹿の情景をめぐる——

宇治十帖の「つらし」・「心うし」・「うし」

語の表記における仮名字体の「偏り」と「揺れ」

——米国議会図書館蔵源氏物語写本の「ケハヒ」と「カタハライタシ」の表記——

イエール大学バイネキ稀覯本・手稿図書館蔵『手鑑帖』の制作事情

九条植通『和歌伝受書稿』について

『紫式部日記』の叙述態度

——御産の空間における物の怪の描写をめぐる——

戯笑歌にみる歌掛けの技——万葉集卷十六をもとに——

洞天思想の東アジアへの流伝と平安時代の漢詩文

——『本朝文粹』を中心に——

執筆者紹介／初出一覧「前篇 小山利彦論稿選集」

あとがき——原 豊／斎藤 達哉

土屋 昌明
飯島 熒
大津 直子

斎藤 達哉
大内 英範
杉本まゆ子
青木 慎一
平林 優子

菅原 郁子
園山 千里
吉森佳奈子

森田 直美

原 豊二

菅原 郁子

大内 英範

杉本まゆ子

大津 直子

飯島 熒

土屋 昌明

小山利彦(こやま・としひこ)

編著者プロフィール



博士(文学)
専修大学名誉教授
國學院大学大学院兼任講師
2014年3月まで、専修大学教授、専修大学大学院教授、
専修大学人文科学研究所所長、國學院大学・東京女子大
学兼任講師を務める。

主な研究業績

『源氏物語と風土—その文学世界に学ぶ—』(武蔵野書院 1987年)
『源氏物語 宮廷行事の展開』(おうふう 1991年)
『CD-ROM 源氏物語 上・下』(富士通SSL 1996年)
『源氏物語の鑑賞と基礎知識 薄雲・朝顔』(至文堂 2004年)
『源氏物語と皇権の風景』(大修館書店 2010年)

平安朝物語の後宮空間

——宇津保物語から源氏物語へ——

栗本賀世子

Kurimoto Kayoko



現代の我々には、とっさに桐壺や弘徽殿が内裏のどこにあるかなどは思い浮かばないが、当時の読者にはそれが常識であり、いちいち説明されなくても分かっていたのであった。作者がわざわざ書かなかった部分まで含めて物語を理解するためには、当時の殿舎の実態を知らなければならぬが、それについては、未だ完全には解明されていないというのが現状である。

本書は、各殿舎についてそれぞれ史料を徹底的に調査する中で新たに知り得た情報を手掛かりに、現存する最古の長編物語である『宇津保物語』と、その影響を多大に受けつつも、さらに発展させ、巧みに後宮を描き出した『源氏物語』の二作品を考察し、その後宮空間を描き出す方法に迫る。

後宮空間を描き出す方法とは？

序／平安宮内裏図／凡例

第一編 『宇津保物語』の後宮空間

- 第一章 朱雀帝后宮考―常寧殿を用いる母后―
 - 一 はじめに
 - 二 史実における常寧殿（后町）
 - 三 母后の内裏滞在と政治
 - 四 結び
- 第二章 仁寿殿女御考―その殿舎をめぐって―
 - 一 はじめに
 - 二 史実における仁寿殿
 - 三 『宇津保物語』の仁寿殿
 - 四 後宮の主役、仁寿殿女御
 - 1 内侍のかみ巻と仁寿殿女御
 - 2 華麗なる「賭ひの女御」
 - 五 結び
- 第三章 東宮の後宮―梨壺の問題を中心に―
 - 一 はじめに
 - 二 史上における梨壺の皇妃―慶子と安子
 - 三 仲忠妹の設定―梨壺に住まう東宮妃
 - 四 内裏にひしめく東宮妃たち―非現実的な東宮後宮
 - 五 結び
- 第二章 藤壺の系譜―『宇津保物語』あて宮を始発として―
 - 一 はじめに
 - 二 史実における藤壺の皇妃たち
 - 三 あて宮と藤壺
 - 四 藤壺中宮への影響
 - 1 寵妃から母后への変貌
 - 2 男主人公との絆―密通の有無
 - 五 結び

第二編 『源氏物語』の後宮空間

- 第三章 宇津保・源氏の承香殿―悲願を果たしえぬ皇妃たち―
 - 一 はじめに
 - 二 史上の承香殿女御―時めかぬ女御たち
 - 三 物語の承香殿たち―後宮の脇役としての造型
 - 四 結び
- 第二章 玉鬘の踏歌見物―宮中参内の意義をめぐって―
 - 一 はじめに
 - 二 承香殿の共用
 - 三 男踏歌の六条院への不参
 - 四 天皇と臣下の人妻の恋
 - 五 結び
- 第三章 女三宮の興入れ―入内・参院儀礼と比較して―
 - 一 はじめに
 - 二 平安時代の天皇・上皇の婚姻儀礼
 - 1 先行研究の問題点
 - 2 益田勝実説の再検討
 - 三 「准太上天皇」の利用
 - 四 結び
- 第四章 宿木巻の藤壺女御―繰り返される藤壺―
 - 一 はじめに
 - 二 御代替わりに伴う皇妃の移動
 - 三 物語の内なる準拠
 - 四 結び
- 初出一覧／あとがき／索引

平安朝物語の後宮空間―宇津保物語から源氏物語へ―

へいあんちょうものがたりのこうきゅうくうかん
——うつほものがたりからげんじものがたりへ——

著者：栗本賀世子（くりもと・かよこ）

発行：武蔵野書院

頁数：256 頁

定価：本体 8500 円＋税

ISBN：978-4-8386-0269-8

史実の精査と
物語の設定の
比較考証

著者紹介

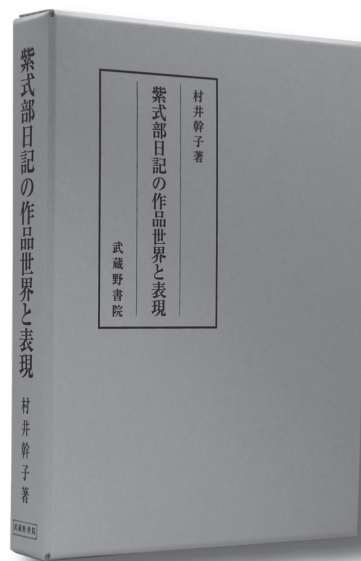
栗本賀世子（くりもと かよこ）

1981 年 奈良県生まれ。
2005 年 東京大学文学部卒業。
2012 年 東京大学大学院人文社会系研究科
博士課程単位取得退学。

現在 日本学術振興会特別研究員。博士（文学）。

主要論文に『『宇津保物語』后宮考―常寧殿を
居所とする母后―』（『国語と国文学』2008 年
8 月）、「藤壺の系譜―『宇津保物語』あて宮を
始発として―」（『中文学』2010 年 12 月）、「女
三宮の興入れ―入内・参院儀礼と比較して―」（『国語と国文学』2012 年 12 月）などがある。

紫式部日記の作品世界と表現



『紫式部日記』は一条帝中宮藤原彰子腹第二・第三皇子誕生の記録を中心とした主家顕彰録的性格の濃厚な日記であるが、随所に作者の憂愁の思いの叙述がみられるとともに、作品形態としても記録的部分、随想的部分、家集的部分と多様な表現形態を持った日記である。本書はこれら『日記』内容の持つ二面的性格と多様な表現形態とは何を意味するのか、また両者はどのように関わりあっているのかについて、作品に現れた個々の表現のありようをとおして考察し、『日記』の作品世界解明の新たな糸口を探る。

ISBN: 978-4-8386-0268-1
定価: 11,000円+税
判型: A5判上製函入
頁数: 400頁11,000円

はじめに ―紫式部日記という作品―

- 一 「日記」の内容とその多様な表現形態について
- 二 「日記」の内容の二面的性格と多様な表現形態に関する主な見解について
 - 1 「日記」の内容の二面的性格に関する見解について
 - 2 「日記」の現存形態に関する見解について
- 三 『紫式部日記』という作品をどう捉えるか

第一章 主家賛美の表現(1)―「をかし」をめぐる―

- 第一節 「日記」における「をかし」の使われ方について
- 第二節 「敦成親王誕生を中心とした記録的部分における「をかし」について
- 第三節 「いづゆる」の消息体による随想的部分における「をかし」について
 - 一 中宮女房個人批評における「をかし」について
 - 二 斎院所と中宮所とと比較批評における「をかし」について
- 第四節 「日記」冒頭部と年次不詳の十一日の晩の記事における「をかし」について
 - 一 「日記」冒頭部」をかし」について
 - 二 年次不詳の十一日の晩の記事における「をかし」について

第二章 主家賛美の表現(2)―「いまめかし」をめぐる―

- 第一節 「敦成親王誕生を中心とする記録的部分」における「いまめかし」について
 - 一 「敦成親王誕生を中心とした記録的部分における「いまめかし」について
 - 二 五節の舞姫への「いまめかし」について
 - 三 「敦成親王誕生に関わる記録的部分における「いまめかし」について
 - 四 「日記」の「いまめかし」の持つ時間軸
- 第二節 「いづゆる」の消息体による随想的部分における「いまめかし」について
 - 一 小大補批評における「いまめかし」について
 - 二 宮の内侍批評における「いまめかし」について
- 第三節 年次不詳の十一日の晩の記事における「いまめかし」について
 - 一 中宮大夫齊信に対する「いまめかし」について
 - 二 当時の人々の今様歌への認識と「日記」の今様歌に関する記述
 - 三 再び「十一日の晩の記事における今様歌」について

第三章 《作者の憂愁の思いを担う表現―「憂し」をめぐる―

- 第一節 「敦成親王の誕生を中心とする記録的部分」における「憂し」①②③④⑤について
 - 一 第一節「日記」冒頭部分における「憂し」①②③④⑤について
 - 二 第二十四節「系帝の土御門殿行幸直前の記事」における「憂し」②について
 - 三 第三十四節「里居の記事における「憂し」③④⑤について
 - 四 第三十五節「中宮の内裏還啓」記事における「憂し」⑤について
 - 五 第三十八節「殿上の淵畔御前の試みにおける「憂し」⑥⑦⑧について
- 第二節 「いづゆる」の消息体による随想的部分における「憂し」⑥⑦⑧⑨について
 - 一 (消息) 休前半部(第46節)と第48節の内容
 - 二 (一) 第46節「中宮女房の個人批評」

第四章 『紫式部日記』の回想の方法

- 第一節 「紫式部日記」の日付とその顕現と喪失―紫式部日記の日付
 - 一 日付の顕現 ―皇子誕生部分―
 - 二 日付の喪失 ① ―「行幸近くなりぬと」―
 - 三 日付の喪失 ② ―「少将の君の、文おこせたる返りごと書くに」―
 - 四 一条帝行幸直前「日記」記事の日付
 - 五 一条帝行幸直前「日記」記事の日付
- 第二節 (消息) 体仮託による回想の方法
 - 一 記録的部分における含話と(消息) 体部分の重なり
 - 二 「日記」の中の(消息) 文」のありよう
 - 三 「日記」における随想的部分の、(消息) 体仮託の表現性について

第五章 『紫式部日記』の表現構造

- 第一節 中宮女房批評をめぐる―
 - 一 暗の盛儀と女房の装束姿
 - 二 「心はせ」と作者
 - 三 再び装束へ
- 第二節 斎院批評をめぐる―
 - 一 当時の斎院サロ
 - 二 「大斎院前の御集」からうかがわれる斎院サロ
 - 三 「二大斎院御集」からうかがわれる斎院サロ
 - 四 「二大斎院御集」からうかがわれる斎院サロ
 - 五 「日記」の中の斎院批判
 - 六 道長像の描かれ方をめぐって

第六章 『紫式部日記』の表現と文体

- 第一節 敦成親王誕生を中心とした記録的部分に見られる文体的特徴
 - 一 皇子誕生記事における道長像
 - 二 歌人文人としての道長像
 - 三 文人としての道長像
- 第二節 文入としての道長像
 - 一 「日記」の道長像
 - 二 道長像の私邸―土御門殿について
 - 三 「日記」の庭園描写の持つ意味性について
- 第三節 土御門殿の庭園描写をめぐる―
 - 一 道長の私邸―土御門殿について
 - 二 「日記」に描かれた土御門殿の庭園
 - 三 「日記」の庭園描写の持つ意味性について

第七章 『源氏物語』の表現

- 第一節 「夕顔」巻にみられる状況表現構造
 - 一 「夕顔」巻における「物の怪」出現場面
 - 二 感覚的印象による状況表現の種々相
 - 三 「葵」若菜下「柏木」各巻における「物の怪」出現場面
- 第二節 「源氏物語」にみられる女性観―紫の上への表現を中心として―
 - 一 「雨夜の品定め」にみられる女性観
 - 二 物語の中の女性たち
 - (一) (空蝉) という女性像
 - (二) (夕顔) という女性像
 - (三) (紫の上) という女性像
 - (四) (その他) という女性像
 - 三 「源氏物語」に見られる女性観

おわりに―『紫式部日記』の作品世界―

- 一 寛弘五年秋から同六年正月まで
 - (一) 「日記」冒頭部(序章部)
 - (二) 皇子誕生ならびに各種生誕行事をめぐる部分
 - (三) いづゆる「消息」体による女房批評と人生述懐
 - (四) いづゆる「消息」体部分以降、寛弘七年正月まで
- 二 初出―覧―あとかき

はじめに／岸田宏司(和洋女子大学長)—Kouji KISHIDA

【パネルディスカッション】

韓国と日本における女性日記

——女性の生と自己表現——／李 美淑—Misuk LEE

日中両言語における女性語の比較

——その一人称代名詞の変遷を中心に——／徐 衛—Wei XU

台湾の近代化と女性／馬 耀輝—Yaw Huei MAA

《文学》

『源氏物語』における宿世と女性

——「宿世」の用例を中心に——／佐藤 勢紀子—Sekiko SATO

閨怨文学小考／鳥羽田 重直—Shigenao TOPPATA

馬琴の描く女性像／板坂 則子—Noriko ITASAKA

森鷗外ドイツ三部作における女性像

——日本古典文学の影響——／岡部 明日香—Asuka OKABE

日清戦争と女性

——芥川文学を例に——／管 美燕—Mei-Yen KUAN

《言語・文化》

東アジアの中の男と女

——詩歌が描いた男と女の物語り——／辰巳 正明—Masaaki TATSUMI

『源氏物語』における女性と漢語／小野 正弘—Masahiro ONO

戦後の女流画家／中村 威久水—Ikumi NAKAMURA

近世の女訓書『女大學寶箱』にみる女子教育思想／高野 俊—Toshi TAKANO

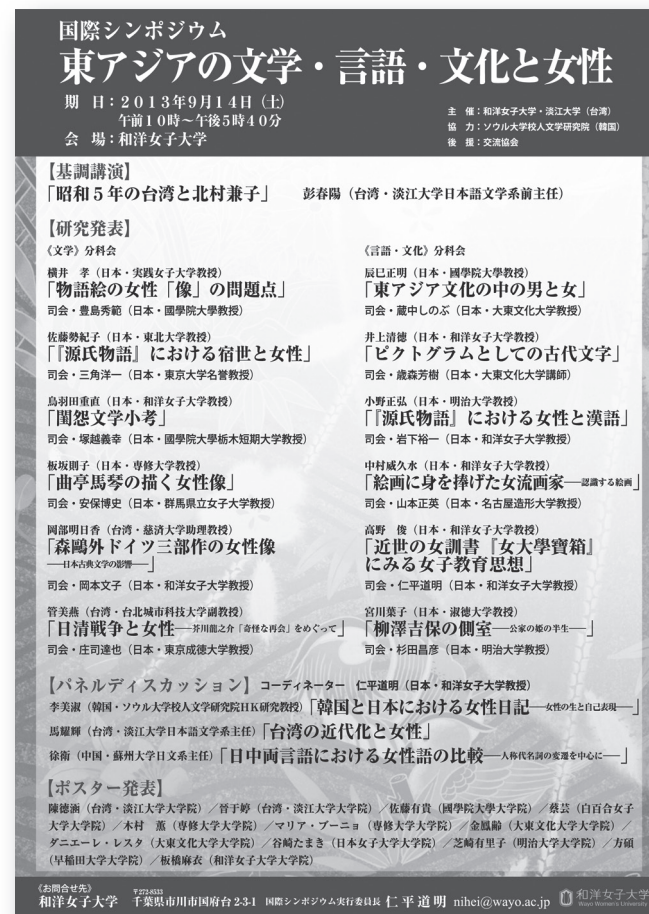
柳澤吉保の側室

——公家の姫の半生——／宮川 葉子—Yoko MIYAKAWA

あとがき／仁平 道明—Michiaki NIHEI

近刊！
予価未定

本論集は、和洋女子大学と台湾の淡江大学との共同主催、韓国のソウル大学校人文学研究院の協力により、和洋女子大学を会場として2013年9月14日に開催された国際シンポジウム《東アジアの文学・言語・文化と女性》の成果を刊行するものである。



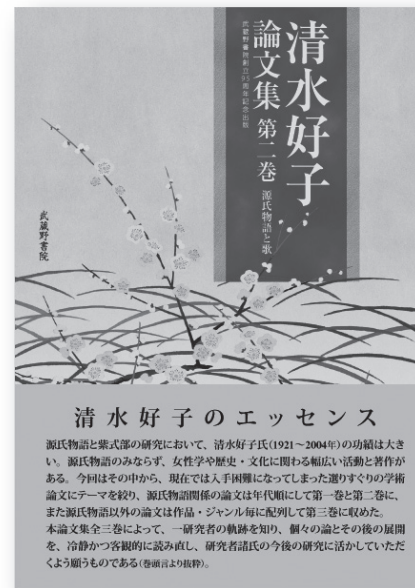
清水好子論文集全三巻

武蔵野書院創立95周年記念出版

第一巻 源氏物語の作風
第二巻 源氏物語と歌
第三巻 王朝の文学

清水好子のエッセンス

源氏物語と紫式部の研究において、清水好子氏(1921～2004年)の功績は大きい。源氏物語のみならず、女性学や歴史・文化に関わる幅広い活動と著作がある。今回はその中から、現在では入手困難になってしまった選りすぐりの学術論文にテーマを絞り、源氏物語関係の論文は年代順にして第一巻と第二巻に、また源氏物語以外の論文は作品・ジャンル毎に配列して第三巻に収めた。本論文集全三巻によって、一研究者の軌跡を知り、個々の論とその後の展開を、冷静かつ客観的に読み直し、研究者諸氏の今後の研究に活かしていただくようお願いものである(巻頭言より抜粋)。



第一回配本

第二巻 源氏物語と歌

A5上製カバー装・368頁定価：本体3500円＋税 ISBN 978-4-8386-0273-5

第一巻 源氏物語の作風

第三巻 王朝の文学



続刊

A5上製カバー装・376頁
定価：本体3500円＋税
ISBN 978-4-8386-0272-8



続刊

A5上製カバー装・384頁
定価：本体3500円＋税
ISBN 978-4-8386-0274-2

第一巻 源氏物語の作風 所収論文

解説 山本登朗

- ① 物語の文体・② 源氏物語の作風Ⅰ・③ 源氏物語の俗物性について・④ 薫創造・⑤ 源氏物語絵画化の一方法—『源氏物語絵詞』紹介—・⑥ 絵合の巻の考察—付、河海抄の意義—・⑦ 源氏物語の女性—后たち—・⑧ 源氏物語執筆の意義—日本文学史の一章として—・⑨ 作中人物論・⑩ 源氏物語の文体Ⅰ—時間の処理について—・⑪ 文体・⑫ 源氏物語の文体Ⅱ—その遠近法—・⑬ 源氏物語の作風Ⅱ—その場面描写について—・⑭ 源氏物語の作風Ⅲ—遠景の薫—・⑮ 源氏物語の人間と自然—夕映えの人—・⑯ 音読論・文体論・⑰ 物語文学—歌による理解—・⑱ 源氏物語の主題と方法—若菜上・下巻について—・⑲ 源氏物語における準拠

第二巻 源氏物語と歌 所収論文

解説 清水婦久子

- ⑳ 源氏物語における場面表現・㉑ 源氏物語の源泉 準拠論・㉒ 作り物語から源氏物語へ・㉓ 古注釈から見た源氏物語—河海抄—・㉔ 源氏物語絵巻への道—吹抜屋台の構図をめぐって—・㉕ 源氏物語の本性と絵・㉖ 屏風歌制作についての考察・㉗ 阿仏尼たちと源氏物語・㉘ 光源氏論・㉙ 古典としての源氏物語—とはずがたり執筆の意味—・㉚ 紫式部—言語的時空の構築・㉛ 草子地からの考察・㉜ 朧月夜に似るものぞなき・㉝ 藤壺の死・㉞ 女子教育と源氏物語・㉟ 朧月夜再会・㊱ 源氏物語の歌—斎宮女御と女三の宮における—・㊲ 源氏物語と歌Ⅰ—「須磨」「明石」と続くこと—・㊳ 源氏物語と歌Ⅱ—一作中人物の言葉—・㊴ 宇治の中宿り—一作中人物の歌・㊵ 『源氏物語』の作風—藤壺と紫の上について—・㊶ 『源氏物語』と『栄花物語』—光源氏と藤原道長—・㊷ 物語の表現

第三巻 王朝の文学 所収論文

解説 田中 登

- 【枕草子】㊸ 枕草子の言葉の使い方・㊹ 典型創造の意図—枕草子の文体・敬語論—・㊺ 宮廷文化を創る人—定子皇后の役割—・㊻ 枕草子と源氏物語・㊼ 清少納言と紫式部・㊽ 紫式部と清少納言 【日記】㊾ 紫式部論・㊿ 日記文学の文体・㊽① 藤原道長・㊽② 王朝女流日記と物語・㊽③ 政治家藤原行成とその環境—蔵人頭時代について—・㊽④ 和泉式部日記の基調・㊽⑤ 女流日記の系譜と紫式部・和泉式部—伊勢集冒頭の女房日記としての重み—・㊽⑥ 和泉式部日記の歌・㊽⑦ 王朝女流文学の形成と背景—蜻蛉日記の場合 【私家集・歌物語】㊽⑧ 文体を生むもの 紫式部論・㊽⑨ 紫式部集の編者・㊽⑩ 『平中物語』解説・㊽⑪ 『平中物語』のわからなさ・㊽⑫ 王朝文学の特質 物語の原型—日本文学史の構想のために・㊽⑬ 私家集のかたち—赤染衛門集の場合—・㊽⑭ 伊勢物語と物語文学—伊勢物語の作り方—・㊽⑮ 伊勢集冒頭「歌日記」の性格—女房日記の原点—

初級編から応用編まで自己採点。「書く」ことにより段階的に覚える、
古典籍読解のためのトレーニング法



書家・財前謙氏の書き下ろし変体かなも多数収録！

検定 変体かな 改訂版 中野幸一 編

とかく読みにくい「変体かな」を覚えるために、今までに無い「書く」というトレーニングを取り入れた、新しいタイプの「変体かな練習帳」です。なぞり書きにより、さまざまな書風の変体かなの字母の輪郭を指先感覚で覚え、さらに読み方を反復練習して基礎を養います。小社刊「変体仮名の手引き」に収められている変体かなを抄出し、練習問題として再構成。初級編から応用編まで、達成度の目安を自己採点しながら、コツコツと着実に自分のペースで進めることができます。源氏物語などの古典籍を原文で読みたい方、変体かな読解が必修の学生の皆さん。是非この練習帳をお役立てください。最新刊です。



B5並製横版カバー装 カラー口絵4頁・モノクロ152頁 定価：本体1200円＋税

研究書・教材等出版をお考えの方へ

95年の実績でご期待にお応えいたします

いつも武蔵野書院の書籍をご愛読頂き、厚く御礼申し上げます。大正・昭和・平成と、三代に亘り出版活動を続けてこれ来ましたのも、皆様のお蔭と厚く御礼申し上げます。

さて、小社では随時、出版に関するご相談を承っております。学位論文等の書籍化や教材作成のお手伝い、出版助成金申請など、どうぞお気軽にご相談下さい。

90年の伝統と、その間積み重ねた経験と信頼をもってご要望にお応えできますよう努力いたしますので、意欲的な原稿を心よりお待ちしております！

原稿・企画書等のお送り先

〒101-0054
東京都千代田区神田錦町 3-11 武蔵野ビル 8 階
武蔵野書院内 前田宛
電話 03-3291-4859 Fax 03-3291-4839
e-mail info@musashinoshoin.co.jp
※ご注意 お送り頂いた原稿・企画書・資料等は原則として返却できませんので、必ず複写物をお送り下さい。

平家物語が一冊まるごと入って
この価格を実現！

NEW 改訂版



Osaka Yukihi
大津雄一
平藤幸一 編
Hirofumi Sachii

A5変形判 504頁 定価…本体2000円＋税

改訂版

平家物語 党一本全

巻第一から灌頂巻まで、この一冊に『平家物語』全文を完全収録。詳細な校訂本文に加え、読みやすさに配慮したルビをできる限り多く振り、さらに最新で信頼のおける頭注を付した、『平家物語』決定版！

—簡便な系図・図録・年表・地図をも付載—

- 第Ⅰ部 王朝物語官名形象論—物語と史実と
- 第一章 民部卿について
 - 第二章 兵部卿宮あるいは式部卿宮について
 - 第三章 内大臣について
 - 第四章 宰相中將について
 - 第五章 蔵人少將について
 - 第六章 尚侍について
 - 第七章 一品宮について
 - 第八章 女院について

- 第Ⅱ部 『源氏物語』論—本文表現史の視界
- 第一章 『源氏物語』の日常と非日常性—一年中行事の円環あるいは宴の喪失—
 - 第二章 『源氏物語』第二部主題論—父桐壺帝との出会い—
 - 第三章 竹河・橋姫巻の表現構造
 - 第四章 客人薫—『源氏物語』第三部主題論序説—
 - 第五章 『源氏物語道しるべ』の古系図について
- 第Ⅲ部 『狭衣物語』論—本文表現史の視界
- 第一章 フィクションとしての飛鳥井君物語
 - 第二章 『狭衣物語』作中歌の形態について
 - 第三章 『狭衣物語』の異文と受容との間
 - 第四章 『狭衣物語』の改作形態について—第二類本を中心として—
 - 第五章 改作本としての九条家本

- 第六章 『狭衣物語』の古筆切について(1)
—伝蛸川親当筆切を中心に—
- 第七章 『狭衣物語』の古筆切について(2)
—飛鳥井雅章筆本との関連—
- 第八章 『狭衣物語』—本文研究の現在を考える—
- 第Ⅳ部 孝標女の物語—本文表現史の視界
- 第一章 『夜の寢覚』の世界
 - 第二章 『浜松中納言物語』の世界
 - 第三章 『果守物語』は孝標女の作か
 - 第四章 雪と月と
 - 第五章 物語作者としての孝標女
- 初出一覧・あとがき・人名・事項索引



充実の664頁。
注目の新刊です！

王朝物語文学の研究

A5上製函入
664頁
定価15,000円
＋税

久下裕利著

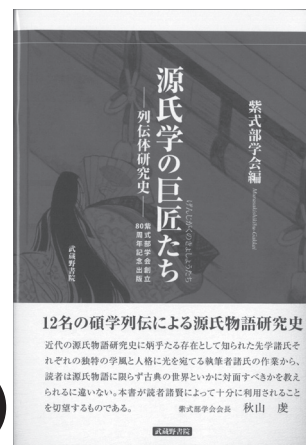
12名の碩学列伝による源氏物語研究史

近代の源氏物語研究史に炳乎たる存在として知られた先学諸氏それぞれの独特の学風と人格に光を宛てる執筆者諸氏の作業から、読者は源氏物語に限らず古典の世界といかに対面すべきかを教えられるに違いない。本書が読者諸賢によって十分に利用されることを切望するものである。

紫式部学会会長 秋山 虔

源氏学の巨匠たち
—列伝体研究史—
紫式部学会創立
80周年記念出版

紫式部学会編 Murasaki Shikibu Gakkai



四六上製
328頁
定価3,150円
＋税

序	——	秋山 虔
津 久 基	——	秋山 虔
島 口 信 夫	——	長谷川政春
折 田 亀 鑑	——	柳井 滋
池 景 次 郎	——	秋山 虔
風 脇 毅	——	増田繁夫
山 脇 宗 俊	——	宮川葉子
武 田 一 男	——	井上英明
岡 岸 德 平	——	久保木哲夫
山 岸 琢 彌	——	森 一郎
玉 上 聰	——	永井和子
松 尾	——	永井和子
阿 部 秋 生	——	鈴木日出男
清 水 好 子	——	後藤祥子
略縁起	——	高田信敬

松尾聰先生の古典遊び — 永井和子

源氏物語の風景

Landscape in The Tale of Genji

Yokoi Takashi
横井 孝著

源氏物語の風景

総頁数：808頁

A5判上製カバー装

定価：本体16,000円＋税

装幀：武蔵野書院装幀室

印刷：精興社

製本：矢嶋製本

ISBN：978-8386-0266-7

本書第五篇「源氏以後」の風景に、

『寝覚』の風貌——「源氏以後」の世界へ——

『寝覚』の風景 一——「広沢の池のわたり」——

『寝覚』の風景 二——「しらかはの院」——

『寝覚』結尾の風景

を収録！ 必読です



序 源氏物語をめぐる「風景」

第一篇 「源氏以前」の風景

第一章 「竹取物語」をとりまく風景／第二章 「竹取物語」の風景

第三章 「竹取物語」をめぐる風景／第四章 「伊勢物語」の風景

第二篇 源氏物語の風景Ⅰ

第一章 「源氏」の物語をめぐる風景／第二章 子どもの情景／第三章 子どもの領分／第四章 子どもの風景／付章 軍記の年齢記述

／第五章 明石の入道と近衛中将の風景／第六章 源氏物語と近衛府の風景

第三篇 源氏物語の風景Ⅱ

第一章 六条院の風景 一／第二章 六条院の風景 二／第三章 「大規模造営の時代」の源氏物語／第四章 「源氏物語」の時代の「喪失」の風景／第五章 「栄花物語」述作者の風貌／第六章 薫をめぐる風景

第四篇 紫式部をめぐる風景

第一章 「紫式部集」の風景 一／第二章 「紫式部集」の風景 二

／第三章 紫式部と鴨川の風景／第四章 「紫式部日記」の風景 一

／第五章 「紫式部日記」の風景 二／第六章 紫式部の心の風景

第五篇 「源氏以後」の風景

第一章 物語から日記へ、日記から物語へ／付章一 平安後期物語の展望一斑——源氏以後」の可能性／付章二 「寝覚」の風貌／第二章 「更級」の風景／第三章 「寝覚」の風景 一／第四章 「寝覚」の風景 二／第五章 「寝覚」結尾の風景／第六章 「狭衣」結尾の風景／跋 「風景」の可能性

初出一覧／あとがき

作者にとってごく自然に現前した歴史的時間ないしは空間という——現在の私たちの見失った、あるいは見失いかけているものを、あたうかぎり復原し可視化する試み

武蔵野書院

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-11 武蔵野ビル8F
Tel 03-3291-4859 Fax 03-3291-4839 mail : info@musashinosho.co.jp